

麻生路郎 ☆ 主筆

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

No.294



十一月號

川柳の雑詠

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可 (毎月一編一日発行)
 創刊大正十三年・通卷二百九十四号

窓口談義

麻生路郎

作家にとつては、どの句が抜ける、どの句が抜けぬと云ふことよりも、一般にはざれたけ抜けるかと云ふことの方に、より関心を持つらしい。詰り量の魅力と云うやつに、ひつかかる訳だと思ふ。

何句に対して何句抜けた。だれそれよりも、何句よけい抜けたと云ふことに特に興味を持つのである。そんなことは詰まらんと云つてしまえば、それまでであるが、全然興味の無いことでもないし、あながち悪いといばかしも云えない。投句数二十句に對し、五パーセントしか抜けなかつたものが一〇パーセントになり、一五パーセントになり、三パーセントになつて行くことは、句を作る楽しみとは又別の楽しみではあるが、自己の進境を

何等悲観することはないのである。作家豆秋の如きは、いたつて募作の方であるが、その特異な作風から個性作家としての存在を誰もが疑わない。彼が句会などいへばベストテンの第一位にならうが、なるまいが、彼の作家としての地位を揺るがすものではないのを見て、教養よりは質である

と云ふよう。しかし、そこまでやつて来るには相當の年季を入れているのである。多年作句している、もうそろそろ境地へ進入しきれないでいつまでも点取虫を続けている作家も居るが、これに、あながちけなすほどの問題ではない。古参作家で、句稿の終りに、「遠慮なく厳選してもらいたい」と添え書している作家がある。で「なか／＼熱心だわい」といささか感激しながら、注文通りで厳選すると却つて快よく思われないで、アツ／＼ばやかれる場合がある。「しば

らく作句していないので、拙いですが、なるべく寛選してもらいたい」と正直に添え書してある方が選者としては寧ろ好感がもてるのである。ドンナ添え書がしてあるうとなかうと、選者としては、

そう極端な手心は出来るものではない。選者には選者としての立場がある。指導的立場からの選なら、テニオハの一つも直してでも抜くことはある。それはどんな句が、いゝか、わるいか、その方向を指示するために一句でも抜く方針を採るのであるが、それは初心者に対する選の場合であつて、多少共作れるようになつてゐる作家や、既に相當の年季を入れている作家の句を選する場合にはむしろ厳選するのが、一等しい方法だと思ふ。作家としては一句でも多く抜けることに興味を持つのであらうが、そこに重点をおいて作句すると、往々にして選者当込みの作品を作るこ

つた作家に願する惧れがある。怖るべきは量の魅力である。

しかし、句放よりもどの句が抜けるか、抜けないかと云ふことに関心を持つようになつて、作家自身の行く手がハッキリと認識出来るようになれば、占めたいもので、抜ける句数にこだわっている作家よりもズン／＼質的に向上するものである。しかし、質の問題は苦汁を飲むにも等しく、量の問題よりも掴みにくいので、作品をあらゆる角度から、検討する必要がある。

十一月月号目次

題字 麻生路郎
表紙 石田兵太郎

名句出現を望望して 福田山雨楼 (一三)

教授の待遇 浅田 右聞 (一四)

岡山縣の女流川柳家を語る 路郎・風来子・七面山・十九平・千代男・茶々・潤年 (一五)

窓日談 麻生路郎 (一六)

常盤御前 富士野鞍馬 (一七)

火傷をする句 小畑自由朗 (一八)

子規も川柳 前田 伍健 (一九)

第三回西日本川柳大会 服部十九平 (二〇)

川柳の英譯に就て 麻生 茂乃 (二一)

詠史川柳につぼん (13) 戸田古方 (二二)

川柳漫 釈(4) 小畑自由朗 (二三)

不朽洞喫煙室 豆秋・鮎美・久米雄 由布・二休門 (二四)

飛燕往来 (二五)

★ 日時・十一月廿三日

廿五周年川柳大會 年記念

川雜出雲支部

會場・出雲市公會堂

本社から路郎師其の他の諸氏を迎えて賑

賑しく大会を開催いたしますので、各地から多数の御來援をお願いいたします。

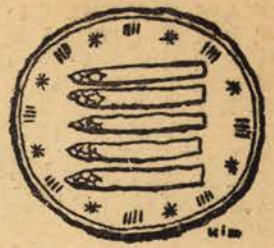
支部長 尼 縁之助

各地柳壇 大鶴喜由選 (二六)

動 靜 (二七)

不朽洞會から編輯局にて (二八)

費(二九)



名句出現を要

望して

福田山雨楼

一 子規は芭蕉の句についてひどいことを云つてゐる。明治二十六年の頃彼はその「芭蕉雜談」の中で「余は劈頭に一断案を下さんとす。曰く、芭蕉の俳句は過半惡句駄句を以て埋められ、上乘と称すべき者は其何十分の一たる少数に過ぎず、否、僅かに可なる者を求むるに寥々晨星の如し」と断じ、有名な「古池や」の句についても「單に聽官より感じ來れる知覺神經の報告に過ぎずして、其間毫も自家の主觀的思想、形体的運動を交へざるのみならず、而も此知覺の作用は一瞬時一刹那に止まりしを以て、此句は殆ど空間の延長をも時間の繼續をも有せざるなり。是れ此句の最簡單なる所以にして却て模倣し難き所以なり」「此句を以て無類最上の句となす人あるも余固より之を咎めず、はた此句を以て平々淡淡々香も無き臭も無き尋常の一句となす人あるも亦之を怪まざるなり

り。此句善惡の外に独立し是非の間を離れたるを以て善惡の標準にあてはめ難き者なり」「古池の句に春季の感情なし」と述べてゐる。また明治三十一年の頃「古池の句の弁」と題して詳述し、最後に「然るにいつの頃よりか此句を無上の佳句なるが如く言ひなして、はては不可思議なる説をなす者加はりて、其廣く世間に知らるゝに至りたり。芭蕉は自ら、古池以後いづれの句も、皆我句として人に傳ふべしとさへ誇れるに、後人が特に古池の一句を揚ぐるを聞かば、芭蕉は必ず不満なるべし。余等も亦古池を以て芭蕉の佳句と思はず、否、古池以外に多くの佳句あると信するなり」と結んでゐる。しかし子規は前記「芭蕉雜談」の中で佳句を論じ「余は千歳の実名譽を荷はしむべき一点の実に芭蕉句集に存するを認む。而して其の句は僅々數首に過ぎざるなり」と喝破し、雄壯、幽

玄、纖細、華麗、奇拔、滑稽、蘊雅等各種に分類して佳句をあげてゐる。これ等子規の論評についてなお幾多の見方があるであらうが、今本論からは離れるのでこれを避けるが、名句と云ふものが如何に難いものであり、定め難く掴み難いものであるかを思い知つた次第である。理論的には名句（この場合川柳に局限して）とは、万人の共感を呼び、獨創的、意表的、尖鋭的で永久性と藝術性を帯びた句、と云う定義も一應成立するであらうが、それは決して黄金やダイヤモンドの品質を鑑定するような訳にはゆかない。鑑定の權威者が名茶器に折紙をつけるように、認定、評價、名声を不動のものとするのは川柳の場合不可能であるかも知れない。それなら名句と云ふものは古今に徴して無いものか、と云へば決してそうではない。存在しているものであるが、またこれからも生れ出す

るものである。名句を誰か生み、如何にして生み且つ見つけるか、これは極めて大切な問題である。

二

川柳家は名句にあこがれ、名句を生み出そうと意氣込む傾向がある。また一般の社会人も川柳の名句にうたれ、うなされ、感服させられて、それゆえにこそ川柳を愛誦する風習がある。たとえその名句と称せらるゝ一句がどの程度の内容と藝術性を備えたものであるかは問題があるとしても、多くの人の愛誦に耐え感嘆を招くことは、川柳の本質、或は本來の在り方に対して、極めて深い示唆を與えることだと云わねばならない。川柳家が大家におもねつたりへつらつたりせず、大衆も亦川柳子に注文をつけたら偏愛したりしなくとも、優れた一句は世を動かし、世を救ひ、世を明るくするから不思議である。試みに川柳の名句集と云ふものが如何に多く出版されたかを振り返つて見よう。（一）内は出版年を示す。類題川柳名句選（明三七）川柳名句集（明三九）古今川柳名句集（明四二）三九評訳川柳名句選（明四二）類題川柳名句集（大十一）川柳名句番附選句集（大十二）英訳川柳名句選（大十三）類題川柳名句選（大十五）現代川柳名句

選（昭八）現代川柳名句集（昭四）うきよ川柳名句集（昭十）江戸川柳名句選（昭十）などをあげることができ、何れもこの名句と云う言葉に魅力があるものである。どんな名句であらうかと云う期待と好奇心が先ず動き、感心と満足が得られると自分でも作つて見たくなる。そして段々名句の実体とも雰囲気ともわからぬものに引きづられて、興味と自慰に足を入れるのが普通である。昭和十三年の頃自分は「川柳は佳句でなければならぬ」と題してこんなことを言つた。即ち「川柳が佳句でなければならぬと云う意味は、駄句、平凡な句の存在を認めぬと云うのではない。認めない」と云つたところまで行く。さうする程ところがつており、次から次へといくらでも作り出されるのだから、存在することは已むを得ないのだ。だが川柳が民衆の心へ浸え、民衆に支持される所以のものは、川柳の持つ此種「佳句」の故であり、川柳の持つ美いの上乗りの故であり、川柳の持つ皮肉諷刺の故である。優れた川柳、句と云われるような川柳、これこそ川柳が出来るのである。だから川柳のしつこく存在を主張する爲めは、人の心にびん

と應える句、人を動かす句、人を捉える句でなければならぬ。即ち僕の主張はこゝにあるのである。川柳に志した以上は、佳句を目ざし佳句を生み得る技法と修練とを休得しなければならぬ云々」これは回覽句評の巻末に添えた言葉で、かなり粗雑であるが今もなおこの考えを捨てていないものではない。たゞ幾分補わねばならぬ点は、佳句の概念であつて、句会や大会で特選になつたり最高点を獲た句を、盲信、幻惑されないことである。一時的、座興的な興奮に酔つたり満足したりせず、どこまでも川柳の本質を見詰めて、冷静に鑑賞批判を加えることである。また自作に対しては反省と推敲を怠らず、謙恭に他の意見を聞くことである。

日頃ラジオ読者文藝で井泉水の選評を聞いていて、「自由律は自然律とも云い、自然に出た言葉、自らなるリズムが俳句である」と云う意味のことをのべられていたが、背に兼ねるところである。そう云う軽い氣持で入門されるのはよいとしても、やはり行手には峻坂と高峰を目ざすべきだと思ふ。この心構えが一番必要だと思ふ。名句を生むことは横綱を出したり將棋の名人を生むこととはわけが違ふが、時間的にも空間的にも非常な努力、鍛練が必要であることには変りはない。

三

大正十一年の頃から川柳名句会なるものが生れ、一般から課題吟を募集し、全國著名選者二十数名の選評を採点し、最高点の句に東西の大関を與え、以下相撲番付に模した番付を作つて、一部好き者の喝采を博したことがあつた。今大正十五年第五回の番付を見ると、(題は親と動くの二題)東の大関は「綴方母の病氣を書いてゐる 耕夫」西の大関は「貯める事ばかり教へて親父死に 梅笑」であつた。後者の方は路郎先生も天位に推された句で、かなり人生味に富んでゐるが、前者はただ無難の句と云うの外はない。つまりこんな興行的な企画から名句が生れるものでないことを覚らねばならぬ。

昭和八年は川柳の最盛期と目して、いゝように思うが、不思議と名句についてのあげつらいが多い。この年半文錢句集を出された同氏はその自序の中で「本句集は大正十二年より昭和五年の約八年間の作品を採録した(中略)作品もこれを厳選すれば三十数句となり、すこし緩選すれば百数十句ともなう」とのべていられる。あれだけ川柳の革新に苦闘された氏にしてなお且つこの言あり、味うべきである。昭和七年四月号のきやりで唾三味氏は路郎先生の句「女十八アダリンの夢」を「買冠りか知らないが、私はこの句を一寸近世の名句と思つてゐる」と激賞していられたが、この句がその前月号で問題になつたので興奮の度が強かつたからかも知れない。文藝春秋の昭和八年一月号に「古今百名吟集」と銘打つて和歌、俳句と共に川柳も百の名句が選ばれた。選者は劍花坊、角窓坊、飴ン坊、雀郎の四氏であつたが、不思議なことに現代句が四句散る機散らぬ機は淋しかる

どのやうに座りかへてもわが姿
信子
俺に似よおれに似るなと子と思
路郎
ひ
幸せは眼も鼻もある子が生れ
益光

へばそれまでであるが、陣居氏は昭和五年十月号のきやりで武玉川の「草市のはかなき物を直切り詰め」について「まことに古今の名吟ではある」と激賞し、久保田万太郎や中央大学松浦教授、さてはホトトギス派の中堅某をして傑作と三嘆せしめたことを紹介してゐる。だがこの句は前記百名吟の中には見当たらない。そして「女房につきについてるたわけもの」と云つた御粗末な句が顔を出しているのである。

それからきやりの昭和八年一月号に「名句推賞」の入選作品を発表している。
紅茶かき廻しまだ疑つてゐる
超児
老教師首を上げると門へつき
迷亭
良心へやんばり触れる母の文
千粒子
花一つ活けて座敷に活が入り
虹衣
銀行を出れば世間はまた日なた
三太郎
妻見へ師走をよそに髪が出来
雨吉
くすぐつて見れば女は泣いてゐた
比呂志
手切金それで男はいゝかしら
逸名
殊更に雪は女の髪へ来る
水府
中折の四み馴れたる四みなり
紋太

しか選ばれなかつた。當時迷亭氏は「私はあくまで選者四氏のづさんと卑怯を責めた。現代に名句が無いのではなく、選ばなかつたのであると断することが出来る」と憤慨されたが、われわれは今日なおこのことを遺憾に思つてゐる。名句を選び出す苦心は容易なものではないが、斯る好機会を逸したことは大きな責任問題であつた。それからこれは見解の相違であると云

以上十四句であつた。これは前の年から「毎年々々全國の柳誌に發表される句は、すばらしい数に上りますが、その中に名句は無いものでせうか、そんな筈はありません。きつと見逃がされてゐるに相違ありません。諸君の御手許にある柳誌を再吟味して下さい。そしてこれこそ推賞すべき句だと云ふのを発見したら諸君の感想なり、推賞の言葉なりを添えて本社へお送り下さい」と募集した中から編集部で選定したものだが、ひいきのひき倒しになつた作品もなしとしない。

同年のきやり、三月号に陣居氏が名吟論をものしていられたが「只今、柳壇で強い関心をもたれてゐる、どんな川柳が後世に遺るかといふ問題を解決するのに、どういふ標準をもつて後世に遺す「名吟」といふものを考へたらいいのか。(中略)後世に遺らない名吟もあるといふ風に考へたらどうかと思ふのである。(中略)名吟選者の名に値ひする選者が現代に在りや否や

赤ン坊の家になつてしまつた
(祝吟) 超児
四んたおもちやが母の眼にのこり
(悼吟) 鮎美
母を笑はして此夜ホツとする
山門
慰めて呉れる火鉢の火をひろげ
空壺

も問題である。(中略)一にその選者の好悪である。好悪は自由であるべきだ、ただその好悪——それでいゝぢやないですか。(中略)川柳の價値は選ばれて始めて定まるものではなくて、創作句それ自身に内包されてゐるものだ。敢て云ふ。選ぶ、選ばれないといふことで川柳の名吟を決定するよりも、内容價値で選ぶ選りてみせる——といふ方へ精神を高揚したいと思ふ云々と云う抽象的試論の域を出ないものであつた。

これより先昭和六年十一月号のきやうで白根子氏が「名句登録」の試案をのべていらるが、選者資格問題と共に今日迄実行的な案は容易に表われそうもない。

終戦後川柳人クラブが昭和二十二年全國川柳推薦句集を編集し、かなり熱心な選出をやつたようであるが、その特選の首位をかり得た作品は上、下両半期を通じて

ふく喰へた晩は黙つて寝てしまひ

叱られてゐる背をそつと誰か抜

の二句であつた。これらは敢て名句と称したわけではないが、名句として遺る作品とは受取り難い。

四 結 論

路郎先生は大正十三年の

昔、「二句を遺せ」と云う含蓄の深い言葉を吐かれた。北齊の藝術的良心と併せ説いて、火の出るような熱烈な主張であつた。また後年「いのちある句を創れ」と云うスローガンを掲げて後進の指標とされた。既にして先生には名句と称せらるべき句が尠からずあり、その藝術的聲價は年と共に加わつてゐるのである

近頃の傾向として大会の余りにも興行的な豪華賞を賭けてゐるようである。句会を盛んにし作句意欲を狩りたててゐることは、あながち悪いことではないが、ややもすれば点取競争の弊に陥り社会のひんしゆくを買う結果を招くことは警戒すべきである。だから一方において柳談会なり、句評会を開いて、眞剣な創作、鑑

不 朽 洞 句 帖

麻 生 路 郎

もう未練ないが糸屑とつてやり

今度來た白衣の鼻の低いこと

心臓の強さ放送すると云う

大阪に未練はないと云う手紙

滝に見とれて譯司をころ／＼ころがした

滝道でいつか女はあとになり

子ども等は一つ向うの滝で待ち

が、先生は倦むことを知らず、情熱の絶ゆるなく、今日なお孜孜として精進をつづけていられるのである。われわれはこれを範とし師としてメツカへの旅をつづけなくてはならぬが、句を生む苦しみとつてはならない。

賞、批判を盛んにすることを忘れてはならない。場合によつては、句評特集号を出して大いに議論を上下することもよからう。局外者(例へば新聞人、雑誌記者)などを交えて痛論するのによいであらう。社会の川柳に対する風当りはかなり峻烈であると思ふが、社

会の反響を進んで求める丈の勇氣が必要である。川柳家の習性として、同志相和し相崩れ、他派相惡み相敬遠する、通弊がある。即ち作品に對しては樂家賞めに陥り、他派を遠廻しに攻撃するの結果、句の鑑賞批判は概ね微温的で、自他共に教えることも教えられることも稀である。これでは佳句と云うものの日光に浴する機会が乏しくなる。披講のその瞬間、柳誌瞥見のその当座しか佳句を味あわず、且つ忘れ且つしりぞけると云う風では、決して忠実な川柳家ではあり得ない。

映画「羅生門」は傑作であるかどうかは知らぬが、映える國際映画祭で一位に入選した。世界の檜舞台で大賞を得たのだ。これを名画と云わすして日本のどこに名画があるか。或る新聞はこの映画の監督である黒沢明を「稀代の魔術師」と評してゐるが、劇や映画のような大がかりな藝術はその協力者、当事者の氣合が一致せぬことは成功はむづかしく、いわんや個々別々の働きではぶちこわしになるより外はあるまい。その点川柳のような短詩個人藝術では、個人々々がその最大限の精華をあげればよいこと、ようであるが、よく考えて見るとそれは一知半解であつて、今日のような柳壇の組織

において、いかに個人がその勇をふるつても知れたものである。どうしてもその強固な組織の力、叡智を集めた努力の結晶でない、大きな成果は得らるゝものではない。みんなで磨き合い、みんなで眞劍味を打ち込んでこそ期待がかけられるのである。

名句についても個人の恣意的な劣作のみに委ねることなく、同志なり柳壇なりが相協力して佳句の出現に力を盡すことが、何よりも要請されなくてはならない。馬でも豚でもよい種(系統)がやかましく云われるそうであるが、川柳作家はそれほど素質をやかましく云わなくともよいが、また素質(天分)を伸ばすことも忘れてはならない。

こう考えてくると名句の出現も天才と努力と云うことにかかつて來そうであるが、何れにしても生やさしいことではないことは確実である。

BK放送川柳

を募る・・・

十二月十五日選送

題「幕間」水谷鮎美選評

用紙はがき二句(枚数制限なし)

賞 佳作五名に薄謝

締切 十一月末日限

投句先 大阪市東区馬場町

BK川柳の会



大阪市 武部 香林

負けたのも忘れ外米辞退する
命に代えられぬ薬がすぐ買えず
花屋の前でフト葬式の匂ひする

横浜市 福田 山雨 樓

スエーデンの細菌学者
結核菌を食殺す培養菌発見

不治と云う烙印しばし預りだ
縁談はスローモーションそれもよし
宿直で金盗まれた息子来る
七万え高校選手鼻血出し
人口へ日本人の薄笑い

脛細く十三貫も切れたらし

芦屋市 寺井 鋭 *

拭く汗も黒し手拭も黒し
親子の数の瓜を冷やして無事な晝
金の話聞かぬ日があれや涼しかる
アイシヤドウルージュ益々醜女にて
失業のそれでも髭を残してる

草臥れた足どり犬も知つてゐる
夏草は茂るわが生活力のみじめさよ
第一本作つて掃けばうれしくて
ガラスこわれたまゝ六年住んで来た
枝に來た小鳥が無性になつたしく

布哇 内藤 草一郎

別宅を訪へば猫まで撫でるとは

左り前夫の恋も終るらん
でも年が年がど云ふて何日か添ひ
その昔ライバルだつたねーと呑み

尼崎市 水谷 鮎 美

しらすぎより
鯨肉のカツ天六の縄のれん
葡萄食べたべ背信の唇うごく
絵画展紫煙ゆる〜ベレー帽

京都市 村松 夢 裡

六つかしいことはぬきです寝て話し
くどかれたとは氣の付かぬ頭なり
てんでものいへない様に唇をつけ
いやだとも言へキツスを繰返し
氣をもんで居るにケロリツとした態度
おつれさまでといわれこそばい眼でこたへ
ボン〜にされて嬉しい事もあり
当の無い収入へしみる秋の風

東京都 宮田 不 二

二百十日非科学的な朝が出る
バックシヤン若竹みどりと申します
夫とは怪我せぬ程度飲んでほし
ワンマンの僕をいたわる妻いとし

大阪府 西尾 栞

自信ある養子養子を悪びれず
翌日は仲居アツパツパで集金して帰り

大牟田市 高田 抱 逸

信念へ愚妻はバーマなどかけず
ビニールの前掛涼しくなつて置忘れ
水中撮影なんて硝子の中の海女だつた
模範青年處女会会の基礎ゆらぐ
長同志仲が良過ぎて疑われ

布哇 市岡 曉 舟

対日講和調印式(二句)

重任を果し葉卷の香も高し
出るどこへ出るとワンマン良く光り
金が出来何んでも彼でも笑つてる
當分は花嫁上目で挨拶し

佐賀縣 松野 えいを

氣兼ねる扶養家族が又殖えて
子を抱いて呉れる心も見え透いて
ホームドレス脱いで女らしいなり

大阪市 市場 浚 食子

夏期講座みな居眠りに來てるよう
急行も止り海水浴儲け
大阪へ先々代が根を降ろし
病人へまた夕立が遠ざかり

うら 盆

経本書く事も今年は子にまかせ
ぜいたくな吹殻ばかり應接間

名古屋 吉田 水 車

乃木さんの写真の載つた古扇

講和近し

箱根からはるかに小手をかざしたり
清水の拜觀料へちと慌て

競輪の尻のあたりへ赤トンボ

俺がいゝ手本だ酒は止し給へ
寝ころんでいずに蠅など捕りなはれ

大阪府 須崎 豆 秋

一年が流れカンナの花咲くに
花柳で泣いて藤間で喰べてはる
メチールを君に注がせて見たい日よ
後援をしますと恋を押しつける
あんたも女警戒線の中に置く

大阪市 竹内 潮 花

ボンに明けリンチに暮れるボスの街

失業をしてから女房また孕み

岡山縣 丸山弓削平

女を憎みつゝ我犬の如く

愛すまいと努む己れは哀しかり

女獲て尙佗しきは何ならむ

哀しみの果てをたのしむ我なるか

老嬢崩る雨に割れたイチツクの如く

岡山縣 直原七面山

慾と慾又も逢潮が喧嘩めき

ボーイフレンドよと新夫を驚かせ

傘直し布の壽命を裂いて見せ

勤務先まさか葬儀屋とも言へず

七面山留守だよと吾子胸を張り

宇都市 上 林粗影

未亡人違つたゆかたで匂はせる

再婚の話亡夫の位牌盗み見る

引越を迫られてゐるにダリヤもカンナも咲き

上役が死ねば昇進すると思ふかい

アリバイも判らず草の實こぼれ

鳥取市 河村日満子

かあちゃんはいカが好きなり今日もイカ

さん呼びが君ン付けとなり見下げられ

應對の言葉がかはる領收書

兵庫縣 田代尋四

課長さん駄目よとキツス断られ

くどかれて見たいと年増横座り

史跡巡ぐり

古井戸も覗いて見ねば氣がすまず

兵庫縣 家 沢 薺花

クラス会酔えば肩書邪魔になり

挽粉まで賣れる製材所につとめ

鮎釣りと詠歌で無事な老夫婦

サンマータイム小さいのから起きてくる

岡山市 藤本満年

晴々と豪傑笑いする解除

穴ばかり堀つて都計やつてます

鉛筆の尖で人事を弄び

口下手がついワンマンのように見え

がみくといふくせ友を失わす

熊本縣 西口如川

錦着て有象無象に取り巻かれ

盲人の夢は淺黄に空が晴れ

三男に生れ東京を知り盡し

徳島縣 姫田夕鐘

吉田全權

白足袋は靴の底のそこにあり

家出をさがすあほらしき旅

岡山縣 福島鉄兒

キツスして戻り孤獨の床を敷き

いつそ身を捨てゝ迷う日もありぬ

男ならと思ふ日もある嫁き遅れ

岡山縣 直原湖月

此の町へ来れば別れた娘に出合ひ

岡山市 藤本茶々

みつめていたら席をたつてくれた

うちの人じゝむさいなと思ふ同窓会

精神的な結ばれがほしいと倦怠期

愛嬌よくと育てられ浮氣者になり

大阪市 福本翮骨

母ちゃんの睡痛いとこすぐ癢り

柳友故米田孤舟君に

佛の灯孤獨が好きなら友だつた

蚬虫で弱り切つて男前

兵庫縣 榎南夏六

唾寒う吐いて見知らぬ駅に佇ち

譚和雅盛

わが友とアメリカさんに云はれたり

薄情といわれる意志が又動き

純情は一人になつてうんと泣き

あぜ道を走れば子供穂にかくれ

兵庫縣 小島無聖

重役の椅子には遠し傍系へ

聞き役となつて円満主義でゐる

先生はお氣の毒よと身を委せ

困ふ身の苦勞も知らず困はれて

岡山縣 高山朗笑

赤い夕陽の中にバス遠く

夢の中の母何処へ行く泣きながら

孔子く今尙水は流れけり

此のせまき家では泣けず山に行こ

岡山縣 横部牛歩

樽曳と知らずに妻は送つて出

人柄は無茶だが金が物を云う

三等車隣の席も子煩悩

宿錢を浮かす夜汽車で風邪をひき

岡山縣 服部十九平

米持つて来たを宿屋に笑はれる

出る汽車へマイク流るゝ歌謡曲

女子寮の洗濯物で塞ぐ窓

青空へ少女歌つてみたくなり

西宮市 田辺由布

爪染めて故郷へガムを派手に噛み

湯豆腐に老らくの恋あたくかい

長生へちろりは俺のマスコット

1





岡山縣の

女流川柳 家を語る

(著席出)

司會

麻生路郎
大森風來子
直原七面山
服部十九平
木村千代男
藤本茶々
藤本満年

が與えられないため、個々の作家についての比較論も出来ない。特にその人の作品を示されれば語ることは出来ても……

十九平「それではここに出席の茶々さんを組上にのせば、路郎「多少の特異性があつても、あまりホメルとノボセ上るので困まる……」

風來子「最も特異性のある茶茶さんの句の中で、洗濯をするのよめだかよいてくれ」

この句は茶々さんの作風が一番よく現われている。

路郎「その句は女性であることがはつきり判る。

七面山「茶々さんは破調の句に特異性をもっていると思うが。」

風來子「円熟でなく荒削りなところから特異性かじみ出ている。」

茶々「破調しか創れないんです。家庭にいる女として境地も狭く、言葉使いも判らないこともあつて、意識せずに破調になつてしまつてゐるのです。私としては、破調に専念する考えなどは少しもななく、五・七・五の句が創りたいのです。」

路郎「川柳塔で選をして來たが、茶々の句が破調とは少しも感じなかつた。

七面山「先生がそれを感じていならぬとすれば成功して

弓削の第三回西日本川柳大会では女流作家の活躍が以外にもめざましかった。大会からの帰途、岡山の藤本満年居に立寄られた路郎師を囲んで開いた柳談会は、期せずして話題がその問題に進んで、ゆくりなくも岡山縣での女流作家を語る座談会になつた。

司會「弓削の大会では女流作家がなかく活躍しましたね。」

路郎「女性で川柳を創る人は非常にふえて來たが、大会へ出る女性はそう沢山はない。弓削の大会では沢山の女性が出席され、男性に遜色を見せないほど活躍されたことは今後女性に句会というものを理解してもらう上に大いに役立つと思う。」

司會「地元弓削の作家ではどんな人が活躍しているのですか。」

十九平「不朽洞会員では久米女、湖月の二人があり、その他多士濟々で、先日夏祭の句会でも市長賞十のうち六は女性があつたほどでした。」

司會「女性がそんなに活躍したのはなぜですか。」

七面山「川柳の家庭化を目ざして、女性だけの句会、すみれ句会を催したが、出発当時から十数名の会員があつて次第に盛んになつたのと、一方各部落に句会があつて男性にまじつて女性が参加したので、自然に女性の力も向上した。」

十九平「部落ごとの句会が女性の熱をあげることになつたので、弓削の中心部へ出るのに一里も一里半もあるところからは女性に参加しない。」

司會「弓削では女流作家を育てることに成功している

が、その他の地域での女流作家の進出ぶりはどうですか。

風來子「岡山大学支部では、十六、七名のうち半数が女性で、男が引つ張られている形です。」

司會「それは風來子さんが看護学校の係長だからで、職権乱用はありませんか(笑)」

風來子「卒業生は二人いるが、在学生は一人もいないのを見て職権乱用でない証拠です。」

茶々「風來子さんは女性に理解があるからでしょう(笑)」

司會「岡山縣廳支部でも女流川柳家の養成をしているようですね。」

十九平「最初三、四人の同人がいたが句会に出なくなつたので、この春から女性だけの双葉句会を作り、約二十人はどの同好者が集つてゐる。」

満年「山陽新聞社内の句会でも、数名の女性がいます。ですが、女性は徒党を組む癖があつて、一方の組が出席すると一方が欠席し、どうも面倒くさいので、ゴボウ抜きにして見込みのある作家を育てたいと思つてゐるんですが。」

茶々「一度日曜日にでも家に遊びに來てくれたらいいんですが。」

満年「如何に愚妻といえども、社の幹部の女房を訪ねてくるようなのは近ごろの若い女性にはいないよ(笑)」

司會「それでは、岡山縣下でいま女流作家として、どんな人が活躍しているか、またどんな人が將來有望といえるでしょうか。」

路郎「作家として年数もまだ浅い人が多いし、岡山縣へ來てもその人たちが話す時間

る。

路 郎 破調に対する考え方が違っているのではないか。僕は五・七・五でなければならぬと決まっています。おらぬ。十七音字中心といっている。字余りであつても、調子の上では少しも邪魔にならず、寧ろリズムカルである。つまり自然に創ればそれが生々としておれば字余りが少しも耳障りにならぬ。だから出来るだけ大胆に創れといっている。

茶々 それで意を強ようしました(笑)

司 會 人を褒えましょう。路 郎 弓削の鳴子さんという人から句を見てくれとか、心境などを語った手紙をもらつたことがある。今度の会で初めてお目にかゝつて、もつと若い人だと思つていたのが、想像よりは少し年輩の人であつたことを知つた。どんな方なんですか。

満 年 十九平門下で、その熱心と自分の生活を踏みしめていることに敬意を表している。

農村の女性としては非常に進歩的な考え方をもち、しかも思つたことを実行に移す代表的近代女性ともいわれる方です。

千代男 相当なお嬢さんであつて、草深い田舎へ帰り、文法的で明朗で、しかも自ら耕

作して他の女性を指導している立派な方だと聞いている。思想も堅実なのに驚嘆している。

満 年 近代女性ほどかく手の汚れぬ事務員などを志すものだが、耕作する農村生活をしてゐるんですから。

七面山 数ある十九平門下の女性のうちでは將來を囑望される一人だ。

路 郎 すつと、つゞけてやらねば僕もそう思いますね。十九平 せいぜい勉強してもらつて優秀作家になつてもらいたい。

司 會 しげ女さんはどうですか。

十九平 黙否権です(しげ女氏は十九平氏夫人)

七面山 最初十九平さんは弓削で活躍しているのを久米女、湖月といわれたが最近活躍しているのはしげ女さんでしょう。

十九平 久米女、湖月さんとも大会で御主人より好成绩だつたのはどういふわけですか。

七面山 去年の大会で湖月(七面山氏夫人)の句を僕が予選してやつたところ全没だつたので非常に叱られた(笑)今年はどう見せないといつて偶ああ成績なので、家では僕の方が小さくなつてゐる(笑)

満 年 僕のところはその反対で、僕が見てやらんと駄目

です(笑)しかし久米女さんは濫作家ですね。七面山 確かにムラの無い作家です。

風來子 岡山縣の女流作家で個性の出ているのは久米女、茶々、苑女さんぐらいだ。

路 郎 鳴子さんも出ているよ。

十九平 第十五回の夕刊山陽募集吟の「選挙」の課題で、久米女さんの

入れなんだ候補のお辞儀こそばゆし

というのはよい句だつた。七面山 確にかつかむところをつかんでいる。よしえさん(風來子氏夫人)は句会に出られないんですか。

風來子 子供の方が忙しいのでね。

司 會 苑女さんは若い女性らしい感傷的で美しい写生句がうまいと思うが、例えば、

戀もなく月に千鳥の曲を弾くなど……

風來子 休から出ているよう

だ。七面山 その句は弓削で川柳劇に仕組みたいと思つたが、本人の意思を尊重してやめた風來子 生活即作句という感じがする。

満 年 娛句樂さんの話では、娘は朝から晩まで川柳がやれるんだからといつていたことがある。

茶々 写生句もよいが心理をつかむのもうまい。

路 郎 普通からいへば感傷的になるような句の境地を、それほど感傷的でなく詠んでいる作家だと思ふ。

司 會 湖月さんはどうですか、七面山氏の純情に對し、湖月さんは明朗型だ。川雜課題吟の自轉車で、保健婦の村から村へハタル踏みなんが性格が出てゐる。どんく 七面山氏より変つた境地のものが出てくれば面白い。

路 郎 七面山君より性格的に強ひように、句の選をして思つた。

十九平 昨日の弓削の大会で、私の選で、

獨唱会パトロンだけが手まき

などは皮肉たつぷりでつかむところをつかんでいる。

満 年 その句はやゝ七面山張りだね(笑)

茶々 そんなことはない。湖月さんの性格ですよ。湖月さんは明朗な方で、句も明朗ではつきりしている。

司 會 その他の有望作家は……

七面山 弓削の桃々さんはその名のように水々しく、その性格が作句に現われている。堅実な花子、若手の和子、多榮この人なんか注目してい

る。

十九平 岡山縣廳の双葉会では、結局は酒に死ぬると知つて呑み

という句を創つた奈々の如きは今年十八の若きだが、こういつた句をこなすようになつてゐる。その他呉帆、みつる、千賀子、輝子、由比、由加里、雅女、薔薇、福娘、緋呂、杏子などが有望である。

風來子 岡山大学では壽子、雅子、とみる、康子などは第一線で活躍出来る作家だ。それに続いて嘉子、未知子、照子などがいる。

七面山 昨日の弓削の大会の機関車の題で天をとつた雅子さんの進境は目だつてゐるようだが……

風來子 僕のところへ句を持つてくる連中は自然進歩して來ている。

路 郎 「川柳雜誌」は傳統として心境を詠むといふことをいつている。古句のように嫁、姑の關係を詠んだり、皮肉を詠んだりしなくてもよいといつてゐるので、「川雜」では女流作家が育つのである。

家庭で詠める川柳であるから、会員の奥さんも作句するようになったのである。司 會 ではこの辺で……



川柳の英訳に就て

麻生 葎 乃

私達日本人には英訳と云ふ事は、散文でも相当に骨が折れますのに、川柳の英訳となりますと、猶更困難で、あちこちと厄介な事が生じて参ります。

川柳は言葉の省略も多く、又内容の一部も、時には文字に表はされて居ない事もあるのですが、此等は私達日本人の間に了解されてゐる事ばかりでありますから私達は眼に映つた十七文字だけで充分に句意を解する事が出来るのであります。

然し國民性も違ひ、風俗習慣も違つてゐる外人が、唯文字通りに翻譯した川柳を見て、文字に表はれてゐる以外のものを何処まで趣味して呉れるでしょうか。宇宙の眞理を掴んだものや、一般人間の心理にふれた句などは、文字通りの翻譯でも理解されるでしょうが、それが少しでも日

本の制度、慣習に關連を持つたものであつたり、日本人独自の情緒にふれたものになりますと、文字通りの翻譯では折角の名句も、アツサリと「そうですか川柳」扱ひにされるのではないかと云ふ危惧の念にかられるのであります。右のやうな缺陷に落ち入ると思はれる句に対しては私はいかう考へました。川柳の翻譯は文字の解釈ではない、句意を傳へるのであるから、川柳を英訳する時には、先づ句主の心境になり切る事が大切であらうと、そして原句の文字に忠実ならんとするよりも、句意を明白に傳へ、句の姿を髣髴たらしめる事に苦心す可きであると、然しながら、此方法もよほど慎重な心構えでからなければ、自己の創作英詩川柳となる危険性がともなうのであります。

は翻譯された川柳が耳に心よく響く調子を持つて欲しい事であり、これは川柳を翻譯する上に何よりも大切な問題であらうと考へます。凡て詩形のもの、なだらかな調子を持つてゐるので、暗誦するのにも便利であるところから、口碑によつて子々孫々に思想や出来事を傳へなければならぬ古い時代には特に重宝されたものであります。日本でも、英國でも詩形文学は未開の頃に存在し、散文は後の世に發達したものであります。かく詩形文学は散文学の兄さん株であるといふわけは、調子を持つ魅力に基くものでありますから、調子を輕視する事は詩の進化ではなく、むしろ撲滅に近づくものであると考へるのであります。日本では川柳と俳句は十七字、短歌は卅一字、都々逸は廿六字と字数の制限があるだけですが、英詩は字数（シラブル）が限られてゐるばかりでなく、アクセントと云ふものが調子をととのえる上に重要な役割を務めてゐるのであります。アクセントのない綴字と、アクセントのない綴字との適当な配列によつて美しく韻律が出来るのであります。此アクセントの特種な配列は四種類の韻律を造つて居

ります。第一の形は「抑揚格」第二の形は「揚抑格」第三の形は「抑々揚格」第四の形は「揚抑々格」であります。「抑」は抑のアクセント、云うのは、アクセントのない綴字の標示で、「揚」は揚のアクセント、前記の鉤括弧の中のアクセントの配列が詩の風格を定める根元をなすものであります。此鉤括弧内の規定の配列法が幾つか集つて詩の一行を構成して居ります。丁度樂譜の一節にあたるやうなものであります。日本語ではこれを一步と稱して居ります。

英詩も多説多作すれば、此面倒に見える韻律の法則も自然に會得されて苦勞なしにリズムカルな詩を詠むやうになるのであります。ですからシラブル（綴字）とアクセント（抑揚）の研究は英詩學とは切つても切れぬ因縁を持つてゐます。韻律の法則は前記通りの四種類であります。川柳にも破調があるように、英詩にも時々何行かの中には破格も出来る場合がありますが、其破格は却つて内容を一層効果づけた場合が多いのであります。日本式に字数をきめて短歌や俳句を英訳してゐられる方もありますが、素読しても快調を缺いてゐて不愉快な氣

柳人交 新春廣告を募る

是非一ト口は！

★一ト口金百円。

幾口でも申込まれた一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ乞ふ一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十一月末日限

★廣告料は前金のこと

川柳雜誌社

がいたします。

如何にデザインをほどこした婦人服でも一定の原型を基準としてゐる通り、又それぞれ流儀を異にしている茶道生花にも共通した約束がある通

瓶の銀山

大坂市大淀區長柄

西通一丁目四四

山銀硝子株式會社

電話欄川四七七番

り、川柳の英訳も韻律の法則をどこまでも尊重したいものであります。

又英詩には此韻律の法則の外に有韻詩といつて一行の最後の綴字と他の行の最後の綴字とが互に韻を踏むことがあります。脚韻を踏むといふことは日本人には少々面倒でありますから、無韻詩でもよいと思ひますが、せめて全体の韻律位はどのえて、美しい英訳川柳を海外へ輸出したいものであります。此韻律の法則は決して人爲的に造られたものでなく、永い年代を通じて洗練琢磨され、極めて自然な発達を遂げたものでありますから、何とかして私も此韻律に馴れ、たゞ一行でもリズムカルな作詩を試みたいと念願しているのであります。が、今の処川柳で云えば、まだ／＼作句の初歩で、指で数えなければ十七字になつてゐるか、二十一字になつてゐるか判らぬと云ふ／＼でありますから、私の希望が達成せられる日はなか／＼来そうではあります。『川柳雑誌』を読んでいられます全国の皆様へボエテイツク或はグロソデイーの良書を御紹介下さることをお願いして筆を擱きます。

第三回

西日本川柳大会

服部十九平記



会場の設備、街頭の飾付、句碑の清掃、大会門の捲き等準備萬端終つて扱て更に氣になるのは明日の御天氣だ。第一回、第二回とも雨だつたので特に此のことが氣になる。既に御到着の路郎先生に此れを話すと「大丈夫だよ、昨年は生々庵が雨を持つて来たが今年は天氣男の僕が御利益を授けるよ」一同安堵。

明くれば九月二十三日川柳忌の此の日は朝からの大会晴れ、昨夜岡山で津山線の一審列車を待たれた豆秋以下の大阪組、廣島組は午前六時半いち早くも到着の一審乗り、八時過の列車では鳥取からの六人、勝田の五人、津山の七人、勝間田の三人等々北からの御客が続々と到着、此の日受付を担当してゐる「はしお」支部の婦人達が未だ來ないので他の役員が臨時受付をする始末、そこへ受付組が到着「受付の受付をさせるなんて世話をやかせるナ」の毒舌を甘受して受付の陣容も整つた九時の汽車でどつと下車した岡山組、備前備中組、四國からの御客もある。駅の川柳燈籠、川柳揭示、駅前の句碑等に見

張り「駅前の矢印句会へ続く道」の揭示に従ひ「祝川柳大会」のビラ各戸にかゝる細長い町を会場へ急ぐ、竜仙洞は急に差支へが出來て夫人を代理に寄越す熱心振り、近郷からは徒歩で自轉車でバスで続々とつめかけ開会定刻十時には会場も殆ど一杯の百四十名、小学校の低い腰掛に行儀よく並んで兼題の清記に席題の句吟に静寂の裡にも活氣が溢れる。

兼題締切十一時、席題切十二時、休憩晝食、選者控室の公民館では十三名の選者が投句を合して二百名に及ぶ苦心の作を食事もそこ／＼に選するといつた緊張振り。

一時再会、流石川柳町とあつて会場には柳人以外の參觀者も詰めてかけて廊下にはみだす盛況、先づ路郎先生の柳話を拜聴し席題四、

兼題九の披露が逐次進められて行く、披露に先だつて焦兒と正司、鉄兒と鉄人、青紅と清幸等間違ひ易い号は姓を附する様にと大会慣れした司会者が着意周到振りをみせる。披露席を中央に右に六人左に七人の選者が列んだが、左側の西端に豆秋、十九平中央に夜潮と定間隔に光頭を輝して三光を競つてゐるのも好ましい。会場風景である。百燭光を改号した夜潮が「節電」の選者であるのも適役で面白い。披露は逐次進められて行く。一題毎に天地人に授賞、久米雄選の「機関車」では天・雅子。地・久米女と女性陣に制覇され男性陣正にダア。

呼名係の笑柳が魚々をギョギョツ、とやつて会場の爆笑を招きビフテキ、抜作等の珍雅号に哄笑が起きる。一句一句に頷く者、氣に入つた句を速記する者、次は自分の句かと固唾を飲むもの、選者の手に残る句箋の數に反比例して緊張の度は高まる。賞品係の不老三十八回賞品を渡して最後の一つが路郎選の天に抜けて自分で自分に授賞したのもい、お取りであつた。次で綜合点により左の通り授賞

此の日笑泉久米女、七面山湖月の二組不朽洞会員が何れもミセスの方が好成績だつたのを銜けばミスター曰く「大会準備に没頭して作句出來なかつた」は苦しい答弁。

斯くして午後四時予期以上の盛會裡に終了。七千枚の句箋を切るのに午前三時までかかつて歯痛を起して鉄兒が腫れた頬をさすりながら「三回目も此の盛會で有難いことだ、骨折り甲斐があつた」と述懐したのは正に全同人の代弁でもある。

大会は終つた。川柳を呼吸し川柳に生くる柳燈弓削は更に明日への飛躍を期してゐる。

愉しき哉
頭痛なき人生

頭痛新藥

タミシ錠



徳天製藥

アメリカ・アイバース・リ社
特許サニテアプ自動包装使用



近作 柳樽



路郎選

何食べてゐるのか細い隣の娘 岡山縣

片山 百郎

金使ふ事だけ知つて隣の娘

同

お勤で飲まれたわと隣の娘

同

百姓はしないと言ふた隣の娘

同

不自由も無いのに悩む隣の娘

同

隣の娘聴けば資本論も読み

同

本山の書状今度はいくら要る

同

お賽銭神をめくらにしたもあり

同

役得の國防色をまだ着てる

同

帰省してマージャンの腕もてあまし

同

夕立を暑さに戻す蟬の声

同

赤ん坊どうにヒョコに追越され

同

院長が無口で頼りなく思ひ

同

としよりの日がふとしより忘れん

同

世帯持悪く看護婦舞ひ戻り

同

院長も話せば判る人と知り

同

料理人手を惜しまれて病んでゐる

同

又水が出そうすゝきが呼んでゐる

同

不甲斐なき子に六十のスクーター

同

連れ立てば銀座は狭き人通り

同

世はバチンコ時代

同

バチンコ屋世にはびこつて孝子出づ

同

唇に耐ゆれど燃ゆる身に勝てず

同

予算がないと看護婦までが云う

同

死の近いベッドで爪を噛んでいた

同

平熱がうれしうて葉書五六枚

同

目玉焼きだけできるわよと照れもせず

同

日記へは妻へ失言詫びていた

同 山本 焦兒

因果にもソブラノばかり生れて來

同

一人つ子が流行歌手になるという

同

火の手の大きさを屋根から答え

同

サービスも限界ですと秘書は逃げ

同

給食の椅子ガタビシと待つてをり

同

私一人で八千万のサインした

同

秋風よ心して吹け服は夏

同

秋風よお前は質屋の爲に吹く

同

一番鶏へ賣れもせんのに脱稿し

同

独立より税金安い方がこらッ

同

大黒の酌で凡夫となつて酔ひ

同

名僧のひと時孫のよい相手

同

インフレへ踊り子高く足を揚げ

同

肺病の僻が好きとはよう云はず

同

税務署をやり込めた妻に驚ける

同

落第の罪を参考書に負はせ

同

口の荒さ氣の短さでおどかす氣

同

割勘にしてから窓が逃げ失せた

同

夏やせに母料理本くつてみる

同

どの位ひ飲むのか仲人聞いておき

同

からむすき與へず老練頭下げ

同

宿題へ唐もろこしの焼ける音

同

映画見て大人のする事知つちまい

同

泳がない父をみんなで砂へ埋め

同

社宅から社宅へ住んで五十年

同

泳がない社長はビールばかり呑み

同

賣店のもう釣銭を構えてい

同

総代になつてしみる庫裡を知り

同

客みんな婦し裸になつて飲み

同

民主義昨日も今日も明日も会

同

何か書け書けば原稿料くれず

同

愚痴捨て、チト長生きをし給へよ

同

春秋筆雜



教授の待遇

淺田右聞

アメリカ滞りの友人から間接にきくと湯川博士は特別優待らしいが年五万弗のサラリーだそうです。一弗は三六〇円だから邦貨にすれば一日五万円の確定です。大阪市立大学長木下良順博士はロサンゼルス大学に聘せられてゐるが年俸一万弗、邦貨一日一万円其他大勢物理方面や文科方面の教授がアメリカの諸所の大学に聘せられてゐるが大抵年俸三千弗邦貨一日三千円位だそうです。す一日三千円でも月九万円です。日本では総合大学は長でも湯川氏の一日分を一ヶ月分としてもらつてゐる位のもので、平教授は月一万円から多くて二万という所です。之では内顧の憂なしに研究に没頭も出来ず、外國の本や雑誌も買えず、秘書を雇ふことも出来ません。私は長崎にいた頃は母本の教授待遇はアメリカへ聘せられてゐる人の最低の半分にあたりました。サラリーと別途収入とでヤット月二五〇円、年三千円になりました。其頃は本も買えなし、秘書も雇えませんでした。家も子守と女中とを雇えました。今日は円貨が低下し、女中も置けず老妻が炊事万端働いて居る。私は欲しい本も買えません。おまけに研究指導はしても講義が出来ない理由で近々無給になるのです。小説でも書かうかと思つてます。

教授サラリーせめて湯川の一割を

発車ベルやつぱり惚れてゐたあたし
勝氣の娘ボン／＼云うて惚れてゐる

路郎先生像を見て(二句)

胸像もちよつと一杯はしげなり 芦屋市

路郎先生ヌードの裡でたじろがず 同

話の泉二十の扉と根氣よき 同

松の手入するどて酒を手びかえる 同

炎天を隊商の如蟻がゆく 愛媛縣

さら／＼と便りが書けたのも秋か 村上 旭童

秋はよし宝石色の星となる 同

ゆく／＼はたになる氣のストリップ 同

恩しゆうを越えてかはしもクリスチャン 石田 沐天

撲られて職長聖者の如くなり 同

こんなにも無い収入の市民税 同

独身へあんた不能者かと問はれ 同

兄さんになつてと恋のはかどらず 住谷 石舟

平凡でいいのと女ひたむきな 同

野球だけ上手になつて卒業し 同

盗まれた服の月賦がまだ続き 同

文獻通り利けば病は治るはず 和歌山 秋月 宏方

左様なら藥の匂ふ天秤も 同

安ホテル飲まず食はずの客も泊め 同

腹の子に式を急げと囁かれ 同

山の線川の流れの石も秋 愛媛縣 渡辺 曉童

第三者超然として利をあさり 同

叱る氣力も消え失せた暑氣 同

キス迄はトン／＼拍子に來たものゝ 具塚市 清水 羅洲

アララギや虚子を知る娘に惚れ直し 同

肩抱けばもう慣れたものゝ 來る 同

降りまつせフト亡き母を想ひ出し 大阪府 兒玉わたる

やれ知事のどうのこうのと大手前

ホルモンと耐にジャンク横町更け 同

お相手が來た順に娘らは立ち 東京都 田中 稻水

約束の停留所一番前に彼がゐた 同

銀座角だれを待つのか御くれる 同

此の辺の地理をアベックよく覚え 岡山縣 峰尾 魚々

女秘書女將と慣れた口をきき 同

奥様になつて地階へ足が向き 同

薄情な男に髭がよくうつり 兵庫縣 酒井ひかる

お神輿が通る間に飯がこげ 同

スポーツはスパイク提げて社に通ひ 同

湯上りの女房榮養探らせ度し 倉敷市 安原 玲花

俺に似す妻に似す子の続書好き 同

榮轉の報らせ吾が影又樂し 同

象も見た西瓜も食べた子の日記 熊本縣 森口 鶴堂

出帆ヘラジオ氣になる事を云う 同

長男の無力を母に頼られる 同

ニューフェイス失踪事件で人氣 倉敷市 安原 桂月

醜婦故ペンだこも出來地位も出來 同

無事に門出たがデコボコ多い道 同

古墳かど防空壕へ目を見はり 大牟田 新谷 風浪

神々が歩きしどこをバスで行く 同

新年へオールドミスの憂あり 同

御自分も入れて五人の社長さん 岡山縣 梶原 一善

ウインクもわからぬ野暮しも 同

長女もう父の甘さを知つており 同

情なや蟬天下に智慧を借り 本ノル、長田 大彦

理髪師は禿げたどこまで櫛で搔き 同

失礼な話聞きつゝ髪を編み 同

ターザンの眞似母さんはもてあさし 石川縣 山田 陽々

火傷をする句

小畑自由朗

私、子供が、学校から借りて來て居た、
「俳句研究」の九月号を何氣なく、頁を繰
つて居りましたら、その記事の中にこんな
句がありました。

枝蝕なけば搔く夜のふかご

ことはし時いかづちの遠まりぬ

秋曉の妻のたちちをさばりて靜

春の夜の妻の股肉湯のごとく

作者は、内野三恵さんと云いまして、
俳誌「かびれ」の宿將だそうでした、本場
ドイツ仕込みのドクタァーで、俳人仲間
は有名な奇人だそうです。

俳人と申しますと、おゝわれは、木の芽
が出たとか引込んだとか、花に風がふれた
とか障らんとか、概して、吾々生とし生け
る者の、此の社會でなもんは、全々無視し
た様に、假を食つて生てる見たいに、超然
たる境地に居らつしやる人達ばかりかと思
つて居りましたが、あにはからんやこれは如
何に、こんな生々しい、花？ 蝶飄詠の境
地に居らつしやる人もある事を知りました、
大変愉快に成りました。

勿論、俳句の通弊と申しますが、其の着
想点の狭い事は、いや、これではあまりに
も、息苦しい程、視野が狭すぎますかな。

それにしてもです、流石はお医者さん
だけであつて、俳句としては珍しく、官能
的で、人間臭いことおびただしいところを
うまく掘んで、いや、さわつて居らつしやる
とても申しますかな、

鬼に角「古池や」などは大分味の違つ
た珍しい句ですね。

現実にはハッピーエンドには成らず

山中温泉蟻蜂橋畔移轉

甲援には合ふか合はぬか亦移り
声援を彼女と知つて起き直り 岡川縣 田垣 方大
未亡人神經質に子を育て
招待にもれてばらしてやる 覺悟
喋らずに居ればこんないい男 貝塚市 並木はじめ
その頭を云うにはやつた歌が出る
おばあちゃんにならなう久し振り
童心に帰り炭團が出来上り 京都市 若山 圭章
他愛ない秘密があつた乙女の日
停電へランブ明治の色で点き
怪談の濡れ場一きわ艶を増し 米子市 由井 富郎
泣虫の小さな意地になつて困り
雀の涙ほどでもない手切金
失業へマダムがおぐるハイボール 京都市 三上さんや
やつと來た電車本屋の客が去り
宿の膳土地の味覚の鮎も添え
借金で立てた義理とは見て呉れず 愛媛縣 藤田 博人
多忙なは何の因果か聴き上手
一合で養子の身分忘れかけ
泣く母と泣かざる父と通夜の席 京都市 佐久間折草
解からずにはめる娘のピカソの画
愛情にあまへて居れば幸福さ
一番星知らせに帰る浴衣の兒 京都市 村本 香果
職さがす或日親しき靴磨
歌磨の額はそのまゝ代替る
我れ／＼の出来るまでなし金の事 大阪市 横田 方眠
くたぶれた顔顔でビルはひけ
人間と云ふ機械なり我がつとめ
奥様の智慧はやたらに棚をつり 貝塚市 芝 無骨
小切手の署名になれた頃つぶれ

辭を低うして原稿を返えされた
義理で笑うこの口許のおもさかな 熊本市 花岡 英子
かうまでに知つたあの人もだえ
秘めた恋いつまでいだしめる氣か
愛想の無い店員で買うをやめ 東京都 石居 高志
九月十二日赤痢にて入院(二句)
秋晴れに車を駆つて避病院
堂々ど欠勤出来る診断書
樂屋から見れば夕餉の支度らし 京都市 藤原みてい
駐在の旦那に武裝が重たすぎ
境内の廣さ和尚にあるプラン
電話もう隣の名刺に刷り込まれ 貝塚市 板東法界坊
夏の滝打たれて見たい音をさせ
賣られのく運命金魚のみめかたち 貝塚市 河楊 梵鐘
新藥へ菌も新手で對抗し
モデル地区に住む貧乏の迷惑な 出雲市 久家代仕男
鬱憤を客まで罵倒してしまひ
パーマまだかけずに戦争未亡人 熊本縣 岡本 昇月
あのヒゲがほしい追放解除の日
浮氣された話自慢になつて居た 尼ヶ崎 赤木 紅山
人間の落目を犬に振り向かれ
民主主義おやちは馬鹿にされたう 宮崎市 野口卯之助
見習工五分もあれば食ひ終り
海水着破れんばかりの太り様 山口縣 多田 穂波
ストリップ親父氣拔のした笑顔
雲よ風よ心をよせる人が欲し 岡山縣 清水悠貴女
もう少しせがんで呉れたら買ものを
何処へ行くつも、田螺また轉ろげ 岐阜縣 石神 古木
友の長男急逝を哀む
子を呑んだ波ども見えす月に戯れ
出し店を値切つて見るも趣味の中 堺市 丹波 太路
占ひのいゝ縁談は氣に入らず

全く此の内野三恵さんと云う様な方は、
「飯食い仲間」においておくのは惜い方で
すね。

と云つて、吾々柳人仲間來てもらつて
も困りますね。

何故つてあなた、こんな煮え繰り返つて
居る「ルッポ」の様な句を、あたりかまは
ず吐き散らされて御覽なきい、心臓デモ
弱くして、且亦皮薄き吾々川柳人は、みん
な大火傷をしますがな。

飛燕往來

須崎豆秋氏(大阪)より

路郎宛

啓 今朝の川柳放送について打明け話を申
し上げます。何分「市民の時間」の放送で
すから解説批評もなるべく平易によく判る
ようにと心がけ、草稿を練つてごうにか出
來上りましたので、いつべん時間のテスト
をして見ようと思つて、家内に蚊帳の中で
枕時計を見さしといて、さておごそかに選
評の披露に、うかり「……以上で御座い
ます失礼をいたしました」チョンと結んで
「時間どうやん」と蚊帳をのぞいて見
ると、家内はスヤ／＼と寝息を立て、居り
第一回テストはさつぱりわやでした。かゝ
る所へ丁度安夢さんと春柳さんとがやつて
來たので、さつそくテストのやり直しに立
ち合つて貰ひ大体終尾よく安心をしまし
た。さて、十二日の録音では先生もよく御
承知の通り、小生は早口になると吃るので
少しスローにやり過ぎお蔭さまで吃らずに
はすみました。十二分三十五秒となつて
なつて終ひ、三十五秒超過になつた
ので、「あとの言葉」三十五秒間が

納税へ妻のへそくり子の貯金 高知市 松下一徹郎
 アルバイト職を得てから雨続き 同
 百度石臼粉などと云ふとれず 大阪市 八木摩太郎
 二日分いつまでこゝに來ることぞ 同
 しぼられたのが眞先に焼香し 岡山縣 水谷 谷水

故郷へ帰りにて

虚勢もう張らず素直に借りて來る 同
 賃上げへ野球を見てるゆとり有り 岡山縣 河野 徳丸
 長女もう時計もほしい年で有り 同
 父さんは吞氣吞氣な子が育ち 宇和島 結城 寂坊
 涙など出すまい意地で捨てた恋 同
 鈴虫へちよいとセンチに落ちて見る 玉野市 迫田美婦適

妻の留守仕事もあればあるものだ 同
 病氣でもしたと思つてみると飲み 鳥取市 岡嶋 芳道
 小使が辞めて金魚はみんな死に 同
 裁判は忘れた頃に開かれる 下関市 伊織 柳坊
 子の寝顔見つめて戦争もうすまい 同
 色恋も税も忘れて釣つてゐる 長崎市 北川 史風

嫁ぎたるばかりか海女の紅をさし 同
 醉ふ迄のサービスで女給逃げ 岡山縣 井野 格一
 独身と云ふても通らぬ年になり 同
 解除の日野良着のまゝで写される 米子市 松本 水鏡
 銀婚に母もいさゝか酔いたまう 同
 くれただけ吸つた煙草のけづら 岡山縣 田中 敬貢

出張の明日へ時計のねじを巻く 同
 運び屋が未だ戦争の靴をはき 大和 岩垣日本村
 國民の心一つであるような 高田市 同
 蟋蟀よショパンの曲をやる氣かい 具塚市 藤川 播舟

不覚にも見合にお茶をこぼしたり 同
 待合室みんな表紙のない雑誌 鳥取市 森本法泉子
 社用炭炭坑節となつて果て 同
 食うだけは困らぬ様に寺を継ぎ 具塚市 堀田 羅漢

歌員へセーラー服は振り向かず 同
 神経痛押して家計を守りぬく 岡山縣 佐藤千代春
 薄給を笑うが如く寒さくる 同
 公僕の義憤は酔うて愚痴に似る 石川縣 加能 潮人

社会科へ家中の智慧らちもなく 同
 さんば追う子の眼に怖いもの無し 高知市 岡本 元馬
 生花の枯れた姿に似た生活 同
 思い出せぬタイプの人よ初恋よ 愛媛縣 村上 和子
 叱る氣の声に返事のあどけなく 同
 病人を喜ばす月咳となり 長野縣 高峰 柳兒
 いたわつてくれる眼浮浪兒見逃さず 同
 機雷着く昔神風吹いた海 新潟市 伊藤 蘇子

上野行き処女の捨場へいそぐ汽車 同
 乳はなす意志の強さを見せつける 岡山縣 福永 壽生
 本葦にしたらもうけた目で見られ 同
 秋の川橋落ちたまゝ水かれる 玉野市 藤田くにお

未亡人男痴漢に見えて來る 同
 社長にもなつて養子が未だ抜けず 具塚市 堀井 一峰
 冗談のように失業告白し 同
 洗濯機だけで背廣が三つ買え 大阪市 香木凡太郎

ターザンみればターザンの眞似をし 同
 お隣はもう退院の声になり 具塚市 池崎 箕水
 入院の國民服で退院し 同
 肩書をどるどやつぱりたゞの人 大阪市 木村 水堂

社会的地位が楯の数で知れ 同
 銀行で貸出だけはツンとして 大阪市 三木 泡起
 赤かりし隣の花も差押へ 同
 警察へ詐偽にかかつた馬鹿をいい 今治市 柴田 青雨

よき話など銭湯の湯氣にいる 同
 秋涼のラッシュ女軍の絢爛さ 大阪市 小倉へどち
 稗実る伴は異國の丘にあり 同
 カツギ屋は人種が違ふように見え 大阪府 青柳扇子仙

カットされ尻切れトンボになつて終ひまし
 た、考へて見ると吃らない豆萩なんて少し
 変で、却つて少し位は吃つた方が小生を知
 つてくれる柳友が「ッラ豆萩が吃つて
 る」といふ塩梅で却つて親しみがあつたの
 ではないかとも思つて見ました。録音をと
 る前夜、大方に寄つて喉自慢で度々入賞し
 ている梅里さんへ「なんぞ美しい声が出る薬
 ないぢやるか」と尋ねて見ましたら「ライ
 スカレーを食べて行きなはれ美しい声が出ま
 っせ」とのことでしたから、当日はライ
 スカレーを食べて行きましたが、もつて生れ
 た悪声は折角の秘薬もさつぱり効き目があ
 りませんでした。

今朝となりライスカレーも間に合はす

九月十五日

(後畧) 豆萩

木村孤浪氏(平塚市)より

路郎宛

私の川雑のよみ方——づつと素読しま
 して、これはいふなと思ふのに赤マークを
 しておきます。一冊をよみ終りますと、こ
 の赤印を再読三読しまして更にいふと思ふ
 分に赤丸をつけます。第三回にはこの赤丸
 を意味します。尤もこの間これ等赤マーク
 の内には私もまれて作句してみるのが常に
 十以上あります。

さてこんな事を毎月くり返してゐまし
 て、昨今時々二
 年前、二年前の
 川雑をくり返へ
 して、見てゐま
 す。が正直に申し
 まして時々一年
 前又は二年前の
 見方と今日の見
 方と何と申しま



にきびとり
 美顔水
 興谷隆天監

おれよりも下手な字も署名する
電柱へ二階貸します子無き方 佐賀市 同 南川 光男
藝術へ生きたる師匠の入歯落ち 同 滝 純香
七人目娘娘してるとも言はず布 哇
正直な所が貴方の缺點だ 同 田中 梢風
悪筆を大臣といふ名でかばひ 熊本市 同 太田 又州
會計を十年勤め竹パイプ 同 吉原 紅月
給仕まで職員という面構え 岡山縣 同 浅野 精亮
切るだけでトマト料理は出来上り 同 野村 味平
恥かしい顔へ袂が短かすぎ 兵庫縣 同 藤原 和朗
失業の身に工場の高い塀 同 同 山本 信陽
お太鼓に結んでワタイ出来上る 池田市 同 多炭 若柳
ビニールベルト人なみの夏となる 同 中谷葉菜子
出しやばりが女秘書の椅子につき 石川縣 同 磯部 白砂
別れましたと化粧濃目なり 同 牛田 晴夫
近く住む美貌を妻は氣にいらす 京都市 同 古田 雨郎
若人のキャンブフィルム足りぬ 同 橋本 幸男
夏の夜スードの一步手前なり 枚方市 同 山崎青粒子
ふけば飛ぶように玄關のある社宅 貝塚市 同 松尾 北雷
パチンコ屋音がせわしいむし暑さ 大阪市 同 武内 夢佛
同様の心算ひつかく物凄さ 貝塚市 同 西野斗四翁
修身科無けれど矢張り子は正し 大阪市 同 尾崎 久平
玄關も物置にして儲けてる 貝塚市 同 大森丙子朗
どびついて見たい乳房がそこ 吹田市 同 岩瀬 雨連
家毎の隙を知つてる 新聞屋 荒尾市 同 山崎青粒子
社宅並び門札どれも課長なり 愛知縣 同 松尾 北雷
至急報隣の方が先に起き 愛媛縣 同 青野天下堂
社宅より賭け麻雀の音が洩れ 愛知縣 同 武内 夢佛
税務吏が心置きなく飲ける店 熊本市 同 西野斗四翁
映画など松之助時代見たつきり 愛知縣 同 尾崎 久平
鷹の爪粉になつてもまだからし 奈良縣 同 大森丙子朗
社宅住ひすれど2号の有る身分 愛知縣 同 岩瀬 雨連

一卷が終つて友達さがし出し 愛知縣 津川 竹坊
母となる隠まだいじらしく 出雲市 和田 柳作
映画観せお茶おこられサヨウナラ 愛知縣 山下山太郎
初老とは咳まで亡父に似ておかし 米子市 小西 雄々
おらが社長同じ社宅の生れにて 愛知縣 本多 柳人
叱られると云ひ娘ついて行き 岡山縣 池田 古心
汗の無い日を淋しがる作業服 熊本縣 鹿本 実信
医業分業五年も先のことかいな 貝塚市 宮本 甲馬
夜なきそば徹夜仕事の手を休め 貝塚市 高梨 晴風
渡り鳥よりも台風狂いなし 米子市 石尾 鈍頑
青柿の落ちしが重く捨てかねる 岡山縣 赤堀 康郎
会議の日程麻雀入れてあり 廣島縣 山田スミ子
子沢山未婚の頃を思ひ出し 岡山縣 大橋 中州
大根を切る手際では切れもせず 出雲市 石橋 齊兆
二ヶ月の出稼ぎ大阪并帰る 出雲市 原 一月
父性愛叱る言葉に遠慮せず 石川縣 塩谷三思楼
泣ける程いゝ映画とは母の評 倉敷市 野田素身郎
にが味ある顔が愚妻は好きと 岡山縣 大塚美能留
消壺をたしかめて寝る夜の母 京都市 鈴木加代子
夕焼を歌つて帰つた子と食べる 和歌山 岡崎 泰三
あの声で歌はなれば良い娘 京都市 倉田 錦州
孫の手にかゝる障子を張り替へる 大阪府 森本黒天子
おけすしの赤塗のおけなつかしき 京都市 井上 吉造
寐轉べばやはり下らぬ男なりき 松山市 渡辺 逸
青空え金の無いのが淋しがり 岡山市 坂井 三葉
女房を蹴倒して来てコップ酒 岡山市 岩田 柿平
未亡人いつかスカート短かくし 岡山縣 河島 露外
旦那さんの耳掃除或る日の二 大阪府 永田六竜子
身の上を聞けば映画の筋だつた 岡山市 平岩 作州
親の云う嘘は子供もだまつてる 廣島縣 田辺吾妻男
朝帰り玄關子供が開けて呉れ 岡山縣 北口 草人

すか句の板味の仕方の標準、態度なんかが大分ちがう事を発見する事があります。矢張り多少の進歩——少くとも停滯してない事を示すものとうねばれてゐます。

又投句の場合は歩いてる時通勤の電車中デスクの前、映画館のなが、随時随所浮んだものをよしあしなしにメモしておき、二三日一回づゝ私自身丈の句帖に轉記——この時大抵句が直されますが、斯うして月の下旬になると始からよんでみて、いゝと思ふものに赤チエツクをする。之れを三回くり返してチエツクが三つついたの丈け投句する事にしてゐます。多分他の方もそうだろうと思ひますが、然し以上斯うした私のやり方は所詮私の独りよがりなんです。今度お逢ひしました時諸先輩の意見もきき、先生の御指導もうけたいと思つてゐた事でございます。

どうも御忙しい時、今度は変な事を申し上げてしまひました。では又。九月十六日

社の黒板

★川維千日前連
絡所へは月・水・金の午後三時から六時まで出てゐる。出来るだけ利用されたい場所は南海難波駅の東方、大劇の四角を五六軒南へ入ル東側の小路(目下お化け屋敷横丁)一べにぼたん(路)。

山之内

妊避のたに

サンデー

セツト 250円
セリ 205円
同上 50円180円



詠史川柳

につぽん

(13)

戸田古方

近代社會(2)

(十九世紀二十世紀)

(十一) 明治憲法

五ヶ條の誓文の宣言は民権運動にかり立てられて一八八九明治憲法と結実する。しかしこれはドイツ流の擬装民主憲法であつた。

憲法會議その抜け道も議せられ憲法發布素直に祝う雪がふり

(十二) 教育勅語

宗教をもたない明治の日本は精神の根柢として教育勅語を金科玉條のものとした。古今に通じ、中外にもとらないといながら君主神権の思想を筋金としてゐることは明治憲法とかわりなし。

皇祖皇宗國を肇めたことに決め教育勅語をらんに損れ誠になり

(十三) 財閥

目はしの利いた下級武士が中心となつて近代産業をはじめたが、それらはたゞ同様の官業拂下の頃から次第にその鋭鋒をあらわしてゐる。旧幕時代の富豪も之に加わつて、だんだん金にものをいやす人のグループが出来上つてゆく。

金、名譽、その亦名譽でも儲け御当主は存外あてがい扶持であ

り疑獄なごちよいな／＼ですんじ

(十四) 労働問題

つくるものにもつかあせることによつてヘンリー・フォードは労働問題を割切つてゆこうとした。しかし軽工業中心のこの國でははじめから女工哀史で出発している。有名な東雲のストライキも女であ

る。落ち綿に若きいのちのむしばまれ煙突の見えるところに住みなれる

(十五) 政黨

工場の際匿者奴がと腕を釣り

政黨とは政見を同じくするものゝ集りとさくが、日本の政黨は最初はどこにかく、利慾を同じくするものゝ集りの同義語であるらしい。よ程眼を光らさない政治を喰ひものにしかねない。

公約を下つ端だけが氣にしてる孤高あわれ長屋の奥の御臨終政黨史なる程意見ちこてゐる

(十六) 綿業

鉄も石炭も充分にない日本で重工業の發展は仲々期待出来ない。繊維工業こそ手に合

つた仕事であつたし、今までそうである。しかし器用な日本人はやがて先生のマンチエスターを凌駕するところまでゆく。

綿くすのくすのくすまで棄られ大阪の煙と水と綿業史綿業史女工哀史にはふれず

(十七) 帝國主義

富國強兵が順調にすゝめば当然、帝國主義、軍國主義となる。台灣征伐を振出しに征韓論韓國干涉から日清戦争と喧嘩になるさ仲々負けておらないのが日本人である。下手な口をきくよりこの方が手つとり早いからである。

奇襲という名でだまし打ちする天皇陛下方歳芝居にしてみせる

(十八) アリストクラシー

ブラトンの國家論の中で貴族政治、金權政治、民主政治、暴君政治と國の種類を區別し、これが輪廻してゐるというが、この頃の日本はアリストクラシーの時代である。三國干渉による所謂臥薪嘗胆の時代を不平もいわずに齒を喰いしる。

跡取りが跋になつてゐる名譽景氣よく軍事予算に手を挙げる學者らしい理窟をつけてけしを

かき勝

(十九) 辛 義理にも日露戦争を勝つたとはいえない。イギリスの對露政策と軌を一にしていたから勝たせてもらえたのである。時を得たルーズベルトの仲裁も日本に可愛氣があつたからであらう。

仲裁のもうこのへんで出るつも焼打もそうと知らねばこそこのと

(二十) 條約改正

もうこの頃には條約改正のうち治外法権は徹廃されていたから外形的には不平等は目立たなかつたが、關稅自主まで漕ぎつけたのは明治も末年になつてからであつた。

居留地がなくなれば平等かと思

元町の土産横文字かいてあり

大阪市文化祭

京阪神交歓

市民川柳大會

日時 十一月四日(日)上午時開場
(十二時半席題×切)
会場 毎日新聞大阪本社講堂
講演 『私の持論の一つ』 藤生路郎 川柳生活四十生
『紀二山』市井の川柳生
鳥島壽三 川柳に求めるもの
の・延原句抄編 武玉川
に就て・堀口堯人

兼題 『交樂』二句 岸本水府選
『米』二句 岡橋宜介選
『悟り』二句 堀元紋太選
『音』二句 友淵貴山選
『母親』二句 平賀紅蔭選
席題 九題 当日発表
各題毎に官製はがき一葉の事
住所氏名明記、金費不要
兼題 〆切十月三十日限(前便)
投句先 大阪市北区中之島・大
阪市教育委員会文化課 市民川
柳大會係宛

主催 京・阪・神教育委員会
協賛 京・阪・神新聞
後援 毎日新聞社

酒販用アイスクリーム用紙コップ
其他食食用紙製品一切



特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社

大阪市阿倍野区晴明通一丁目

電話 天下茶屋 2802 2803 2301



子規居士五十年追想祭座談会

子規も川柳

前田 伍 健

子規も川柳をやった
だが落第だった……

昭和二十六年九月二十一日
道後温泉楼上で子規追想の座談会が開催された。重なる出席者は愛媛新聞社側の選定で、松中の人々を合せ左の通り
安倍能成（学習院大学長）高浜
虚子（俳人）土屋文明（歌人）
中村草田男（俳人）柳原極堂
（子規庵主人）景浦稚桃（郷土
史家）岡田禎子（作家）伊藤秀
夫（愛大総長）田中宗坦（正宗
寺住職）井手淳二郎（愛大文理
部長）其他と私等で話は今迄
あまり現はれて居ない子規の
事に及び即ち婦人関係、野球
の話、性格、能筆、等々で俳
聖子規でなく人間子規としての
近頃なき座談会で、臨席の
人々は土屋氏を除く外は皆
松山出身者ばかり、生前の子
規と親しくした人々も多く話
は次から次へと発展した（詳細
と云いたいとその一部だけ
愛媛新聞の九月二十二日及二
十三日付に掲載された）談
たま／＼野球に及んだ時、子

規の雅号野球（本名升ノボル）
をノボルともちつたもの。能
球がありそれから老櫻・櫻庭・
香雲・好吟・盗花・花風など沢
山ある中に夢之助と云うのが
ある。この号に就て、井手淳
二郎氏が古島一雄から聞いた
と云う一節に、例の日本新聞
社記者時代に坂井久良氏と
親交あり今に遺る縁側に在る
子規の写真は久良氏氏が二人
曳人力車で病床を訪問し撮影
したもので、これは写真の裏
え子規が自筆で写真は坂井氏
の写すところとある有名なも
ので、このような関係から久
良氏氏に川柳を勧められ其処
は何んでも負けずの氣性の子
規とて川柳をものしたが、も
のに成らず「こんなものは文
学に非ず」と見事に落第して
しまった。勿論久良氏氏と議
論し合つた事は当然である
が、議論や筆ではこれは久良
氏氏も子規には一歩も二歩も
譲り、川柳は川柳として、短
歌で同志と成り例の明星派、
等の攻撃に協同したのであつ
た。つまり子規も川柳に一度
は手を染めたが、ものに成ら

なかつたのであると井手文理
部長は話された。その時の句
は随かでないが「きん玉の大
きな人の晝寝する」とか「團
十郎の目玉トンボの目玉な
り」とかであつたように思
う……生前久良氏氏が私に手
紙をよくくれた中に子規は淺
黄裏で野暮だから川柳の味は
判らない云々と氣焰を揚げて
居たものであつたが惜しい事
に戦災でこの手紙を皆な失つ
てしまつた。尙ほ其の当時、
例の子規居士の写真は二枚写
したが一枚は誰れだつたか歌
人が持つて居る筈だあつた
記憶を座談会で土屋文明氏に
私が聞くと「さあ、それは多
分岡麓さんだろう……然しこ
れも戦災で焼いたのでないで
しょうか」と話された。兎に
角あの子規居士が一度は川柳
に手を染めたこと云う事は面白
い事である。つまり私等は子
規が手を焼いた川柳をあれか
ら今日まで今日から將來を開
拓して居るのであるから痛快
とも云えよう。

詰つて居る」云々と語つた。
社会思想の流れは川柳の方
がお先に進んでおるが俳句が
美を考慮せずとなれば、俳句
と川柳の境界は複雑になるで
あらうと私は思つた……子規
居士が今あらば、川柳も變つ
て居り俳句も變つて居る
であろうと思うと五十年祭に
際し人間子規を思い子規の偉
らさと氣魄と熱と風格を今更
ら乍ら仰いだ。



不 朽 の 洞
喫 煙 室

須 崎 豆 秋

「弓削の大会はどうだつた」「岡
山縣柳界のみんなと話して大いに
刺激させられたネ」「のんびりバ
チンコばかりやつてはいかんと
思つたか」「その通り々々弓削で
ベニシリン注射して貰つたやうで
シヤンとして帰つたよ」

庭の千草

水 谷 鮎 美

ふと眼を思つた。無病の時には
そんなに思はないが五体は貴い、
腫が痛むのなら反省をして合掌
せれば成らない。秋はふかみゆ
く
月はしづかにこゝろに昇る

弓削の第三回
西日本大会の日

濱 田 久 米 雄

豆 秋

「あんたの駅の事務室へ一
寸休ましてもらいましたんや
が、短冊型の紙に一日に一
つ、みんなのためになること
を……と書いてありましたな
あ、あれ一日の一を取ると川
柳になりまんあ」

久米雄「そういう氣持で書いたの
ではないのですが、そう云は
れるとそんな氣がしますな」

書いたのが短冊型の紙、書いた
人も見た人も川柳人となると、ひ
とりに川柳が出来ていた。

川柳手帖

田 邊 由 布

記憶力がよくないせいであつて
何処へ行くにも手帖を持つて、其
湯其場に生れて来る句を書き止め
て置くことにしている。

○月○日街の晝の風呂に浴して
いてフト生れた句が二つ三つ、上
るまで記憶に自信のない私は浴室
から首を突き出して番台の娘さん
に「鉛筆と紙切れ！」と叫んだ。
石鹼や剃刀なら解るが「鉛筆と
紙切れ」では何う思つたでしよ
うな。

改号の弁

國 弘 二 休 門

半休門再度改名を決意、理由は
甚だ薄弱、姓名學上字の訓教が大
変悪いとのこと、今後二休門とお
呼び下さい。



常磐御前

富士野鞍馬

永暦元年（一一六〇年）源義朝の妾常磐御前は、大和竜門の里に隠れていたが、母が清盛に捕られていつたので、京六波羅に出頭して、身を以て許しを乞わんと、今若、乙若、牛若三人の子を連れて、京都をさして来たが、伏見のあたりで吹雪にゆきくれたところでは、旧深草練兵場のところ、たしか碑が立つていた。そこで宗清に母子四人が捕えられ、宗清が常磐を切らずに、松の枝を切つて色を変えよと諷刺したと、常磐津の淨るりになつてゐる。

（拾五・タル二）
常磐木に見え根盤を切り残し
（タル一一）
常磐は子の爲常磐津は親の爲
（タル三六・同一九）
その時常磐は二十三才の色盛り、たしかに美人であつたようである。
そこで三人の子供も助命されて、今若は醍醐え、乙若は天王寺別当八條宮え、牛若は鞍馬寺の東光房えそれ／＼僧

にするることにして預けられた。

子の爲に常磐小便組となり

清盛は尻みやのある後家を持ち

（拾五）

小便組とは、江戸時代仕度金を取つて妾にあがり、寝小便をしてお拂い箱にさせる一種の詐欺で、尻みやは三人の子供をいつたものである。

「義経記」には
清盛は常磐が許え文を遣わされ
けれども、取りてだに見す。されども文の敷も重なりければ、貞女兩夫に見えずという謠にもはづれ、又世の人の諷刺をも思はれければ、たゞ三人の子どもを助けん爲に馴れぬ衾のもとに新枕を並べ給ひけり」
と書いてある。

入道をのせて味方を助け船
（タル一二七）
道ならぬ帯を常磐も夜の鶴
（タル一三六）
それで清盛の妾であつた佛御前は、前の妾祇王、祇女のかくれている嵯峨へ隠れてしまつた。

後家が来て踊子みんな嵯峨へ行き
（タル二 末四）
そこで古川柳は鋭く闇中まで観察して

義朝とおれとはごつたなごめ
（拾六）
牛若が目がさめまますと常磐いひ

（末四）

義朝ははだかときわはうづみ着る
（タル八）
入道にいれさせたのが常磐味噌

（同一八）

なんという作があり

淨海は常磐の方につけた名
（拾五）

清盛は剃髪して淨海といつたところ、二十一年後の養和元年（一一八一年）には清盛も死に、それから四年後の壽永四年に、平氏一族は常磐の子牛若の義経に壇の浦を最後として亡ばされた。

壽永まで常磐を笑ふ嵯峨の庵
（タル一六〇）
ふところに抱いていたのにはほろぼされ
（拾五）
壇の浦で義経は、清盛の二女徳子、安德帝の御母にあたる建礼門院を助けてうまくやつたというので
よしつれも母をされたて娘をし
（末初）
母の返報義経は門院を
（タル一六六）
という句も詠まれている。

常磐はその後一條長成に嫁したといふことであるが、歿年はわからない。

麻生路郎先生

壽像贈呈川柳大會

私たちの恩師路郎先生が昭和廿八年の春を以て川柳生活五十年を迎えらるるので、その第一企画として此の度先生に壽像切望いたします。

日時 昭和廿六年十一月三日（土）午後一時
会場 大阪市立大宮小学校講堂（大丸百貨店南ノ辻東二丁）

司會者 上田 翠光

開會の辞 龜山 晴峯

挨拶 川柳不朽洞 中島生々庵

壽像贈呈

祝辞

謝辞

兼題「不老」

同「前説」

同「女」

同「麗」

同「門下」

閉會の辞

會費 五十円

賞品 三光に各選者の色紙短冊を贈呈

記念撮影

締切 十一月二日着便（各題三句）
投句先・大阪市南区三休橋南詰中島小兒科診療院内
麻生路郎先生壽像贈呈川柳大會事務所宛

主催 川柳不朽洞会
大阪市住吉区万代西五の二五

耳鼻咽喉科 半田病院
院長 半田哲三郎（一哲）
大阪市南区長堀橋交叉点西・電話船場五〇〇番

大会委員
生々庵（委員長）
丹路・香林・亞純
玲之介・翠光・古方
栗・里十九・後食
子・紫香・小松園
白柳子・竹莊・文蝶
晴峯・瓜平・淡舟
貴山・愛論・方正
哲水・傳也・正司
泰柳・夢裡・いわを
・喜久堂・青丹子
・史葉・志乃布・斜介
・梅里・貞女・野介
・鏡々・恒明・安夢
・正則・白香・花村
・一杉・三司・無名林
・無人・鳥莊・關骨



川柳漫釋 (3)

小畑自由朗

「よう」
「呀、課長さんでしたか」
「はつ／＼、いやにびつくりするぢやないか」
「はあ」

「あの連れの人、だれだい」
「はあ、あれ、ほ、僕の家の内なんです」

「ほう、おかしいね」
「いえ、ほ、ほんとうに僕の家の内なんです」

「はてな、すると、今心濟橋の上で出会ったのは誰だつて」
「ひえッ、ほ、僕の家の内とですか」
「娼女の課長に逢った戎橋」
(小柳)

「父うちやん、ランドセル買つてもらつたよ」
「おや／＼、もう、ちきに學校だれ」

「あ、もう十五ねんねしたら僕學校え行くんだよ」
「そうかい／＼、しつかり勉強するんだよ」

「うん、僕學校え行く頃に、父ちやん、僕、此の遊樂所からお家え戻つて来ると云つてたれ」
「……」

「もう十五ねんねする間にきつと癒つてれ」

「……」
「れ、父うちやん、そうして母ちやんに赤飯たいしてもらつて一緒にお祝いをしようね」
「療養所まで見せに来るランドセル」
(千舟)

「うわあッ、しもたッ」
「どないしなはつたんだす」
「やられたッ」
「やられたて、何をだす」
「財布や」

「ひえッ、ほな、今あんなと並んで呑んで居た彼奴がやり居つたんかいな」
「い、や、人をうたがいうな」
「……」

「わえが悪いのや」
「えらいッ」
「……」

「あんなの其の氣性、わたしは惚れました」
「お、けに」

「今夜の勘定、あつさりとは引いたげます」
「あ、あほうな事を」
「電車賃もないなら差し上げます」
「おつさん」
「何を泣きなばる」

「……」

「……」

「すまん」
「あんな泣上戸かいな」
「ボロ服やけんぞこれとつといて」

無一文と云うスリルを君知るや
(豆 秋)

「へーい、この私とて五軒目とは、随分あなたもいける方ですな」
「はつ／＼、梯子は短い奴で七段とかですすかれ、もうあと、」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

同 舟 近 詠

「云いますすからね、つまりそのアルコール性血液が僕に隔世遺傳したつて云うわけなんでしょうね」
「成程、あなたのお祖父さんは有名な酒豪だつたんですが、お若くして亡くなりましたよ」
「え、つと、いくつて亡くなつたんですか」
「たしか四十二の厄でしたよ」
「そいつあいけれえ、四十二と云や條の歳ちやれえか」

松山 前田 伍健

映画館こゝにも税の懸垂布
藝術の論を笑つてインク壺
密醸酒うつかり自慢してばれる

大阪市 橋本 綠雨

ねむられぬ旅にトンネルばかりなり
久々の宿で開いてる虫の声
宿帳にあらためて聞く妻の歳

東京都 富士野 鞍馬

三十の処女は会社の至宝にて
勇ましく修学旅行濡れてゆく
出てる方がいゝと姐さん美しい
焼酎を女にのましもてあまし

遺傳ですなどと息子ちやみある
(玉 鬼)

「おい／＼課長」
「はい」
「あの一番端つばですしばかり喰つとる男、ありや一休何者かね」
「はあ、あれ、富岡つて云う、う」

「……」

「……」

「ほう、あんなのいつ入社したのか」
「はあ？はい、あれでもう、彼れ此れ二十年近く移りて居るのでございます」
「ほう、あそう、一休何をしとるのか」
「はい、倉庫係の方をやらして居りますので」
「真面目な奴かね」
「はい、そりやもう固い一方の男でございまして」
「そこかい、ちや、一つ盃をやるかね」
「末席で下戸はだまつて醬司を喰べ」
(淡 舟)

「姉ちやん」
「もう一寸待つて」
「鏡ばつかし覗いとらんと早うアイスクリーム喰べに連れて行つてよ」
「うるさいわれ、あら、向う通つてる人、家深さんちやなくつて」
「あ、い、そうだよ」
「あの人、あんなどう思う」
「どうつて、どうなの」
「すき」
「うん」
「きらい」
「うん」
「何故」
「あんな川柳ばかり作つてやがつて、キヤツチボールの下手くそな奴、見込みがねえや」
「そう今日姉ちやん」すいそがし

いからアイスクリームは又明日
ねー

弟に彼氏が好きか訊いて見た

(薔花)

「一寸來ん間に、えらい立つたな
建物が出来よりましたな」

下

何んの会社だす」

「会社ならよしいねやけんぞ、
税務署だつさ」

ハツ

無くて濟む役所が出来る埋立地

(文庫)

路集

手荷物 大西 八步選

手荷物をはなさず初の一人旅
ハイヒール手荷物一つ持て余し
手荷物を提げて番頭如才なし
手荷物のラベルに遠き夢思ふ
手荷物で来た花嫁と二階借り
エチケットなどと彼氏は持つてくれ
頼まれた手荷物段々重くなり
手荷物が改札口でもめてゐる
手荷物になるがと土産くれるなり
日本に発つ手荷物の多いこと
網棚の手荷物異状ないあくび
手荷物が二度も喫茶へ立ちよる
手荷物に持ち様があり新女性
手荷物を窓から渡す発車ベル

寂坊 美嬌嬌 蛙声 吉造 ひかる 宵草 夏六 同 卯之助 曉舟 不二 へとち 遼 葉光

不朽洞

▼中島生々庵
博士は十一月
三日の路郎先
生壽像贈呈川

会から

日の京阪神川柳人交歓川柳大会の二つの大会の世話役の総元締を背負い込んで縦横無盡の活躍中である▼浜田久米雄氏(岡山縣)は職名が岡山駅改札掛主と改称▼吉田斜水氏(大阪市)は次男伸雄君を儲けられた▼佐野ト占氏(八代市)は観光事業で旅から旅へ眼の廻る

忙しさにあるとのこと▼河村日淵子氏（鳥取市）は十月には全社の家族慰安演藝会が催されるので練習に多忙とのこと、本年は加賀見山の出し物で、はじめての女形、六尺近い岩藤が出来るそうであるから、さぞ見ものである▼「岡山縣の女流川柳家を語る」座談会を九月廿四日午後、川稚岡山支部で開催（記事参照）▼富岡淡舟氏（大阪市）は十月七日城崎温泉に清遊され「みやげ屋に呼びとめられた宿の下駄」の句信があつた▼

小沢史葉、森下愛論氏等は九月廿一日上京、廿四日帰阪された▼池沢榮居氏（姫路市）は川維姫路支部に出席されたとのこと、なほ年寄りの日に逢うて「老人が現役の國うらやましう」▼「ワンマンのお焼く小村にくらべられ」の句を寄せられた▼福島正則氏（大阪市）は二男坊を儲けられたおよろこび申上げる▼種瓜平氏の祖母シナさんのが十月九日午後六時、八十才の高齡で急逝された、謹んで悼む▼第三回西日本川柳大会へ大阪方面から下記の諸氏が出席された。麻

新會員紹介

十月

木村千代男氏（倉敷市）正

滿年氏推薦

一品料理と生そば

芝雀

上六キヤビトル

西館夏三車目

手荷物へ又加はつたわさび漬
手荷物にうつめられてる旅廻り
手荷物の中から旅の汚れもの
一泊旅行へ娘の手荷物の多いと
手荷物の位牌先づ出す赴任先
旅の空荷物持ち台ふ丈の縁
赤帽へあこをやくつた銀狐
手荷物は祕書が持つてる展覧車
子の視線浴びて手荷物上げられ
手荷物を解く間も喋る里帯り
手荷物をまとめ女の身づくろひ
お別れの言葉手荷物持ち愛へる
手荷物を縛る解雇の淋しい日
手荷物の土産をあてに子が迎へ
荷造りを直し手荷物受けてくれ
手荷物の両手に余る旅に飽き
京都へもよつて手荷物つゝあへ
手荷物も新婚らしく軽くさげ
手荷物の軽さが旅に馴れてゐる
人間の落目身軽く荷をまとめ
手荷物の中に薙落へのある家出

英 忠 満 茶 鉄 実 芳 水 同 靑 三 代 光 日 箸 花 方 山 草 潮 人 大

手荷物を預けて仰ぐネオンの灯
七面山
もう一度母手荷物を試て言ひ
びかか
上京の手荷物皆に手傳はれ
草骨
手荷物にこれだけ詰めて忘れ物
山雨樓
手荷物の中味綺麗な嘘で済み
雄々
手荷物へ家中の智慧全部入れ
草骨
手荷物に姑の意地を見せる紐
芦穗
手荷物が忘れそうに終列車
三葉

賣店 大鶴 喜由選

賣店になごみ重れて借りが出来
潮人
賣店より見舞のリンゴ届けられ
敬貢
賣店は一田安い廻り道
青粒子
賣店の交替ぐづて入るとこ
晴芽
慕間のベル賣店は身構える
山雨樓
賣店のウドンで見舞あしらわれ
簪花
賣店で一人が買えばみんな買ひ
同
賣店の賣娘にあつた片えくぼ
格一
賣店の娘何時でも隣りである
美謝適

賣店も入れてスナツプ撮つてくれ
 附添同志賣店へいきを抜き
 賣店の前列仕舞ふ雨となり
 賣店の品の中から額を出し
 こんな賣店に三人生きて居り
 賣店へ錢持つた子が伸び上り
 方言に駅の賣店ちとあわて
 賣店の雜誌埃のまゝ賣られ
 賣店が出来て赤字が続き出し
 賣店に言傳を云ふ山の駅
 賣店は天井からも何かつり
 賣店で東京までの本を買ひ
 賣店は空いてる汽車も云ふてん
 賣店を出す約束で身をまかせ
 賣店に戸が立てられて秋となり
 賣店の桃ころがして汽車が入り
 賣店へ立てば背の子つかんでた
 地賣店で義理の土産を思ひ出し
 天賣店へ斜に母は手を引かれ
 賣店はお米の世話もする噂
 喜由

芦穂
 英子
 夏六
 卯之助
 谷水
 七面山
 三葉
 満年
 吉造
 晴芽
 格一
 方大
 ひかる
 満年
 逸
 蓉花
 七面山
 喜由

生路郎師、須崎豆秋氏、市場沒食子氏、北川春巢氏、石岡正司氏。

いのちある句を創れ

を地柳忌

投稿規定
用紙は原稿用紙
文字を正
確に開催月日及場所記入
締切毎月廿五日
投稿先本社宛

本社川柳忌(大阪)

九月一日 午後六時半

於 大宝文化会館

川柳忌といふので熱心な作家達は定刻前に早くも会場の椅子を占めて句想を練つてゐた。当夜路郎師は最近柳忌に見る川柳コントに就いて語り、小咄とコントの相違を説きコントの意義を明かにされた。鮎美氏は九月号の川柳塔から七面山氏の一句と鮎美氏の一句を拾うて短評を加へられた。次に西尾栗氏から路郎師の胸像が天王寺美術館に出品せられてゐるとの御案内があつて、兼題席題の披露に移つた。本月のベストテン不朽洞優勝力ツプ把持者は土井文蝶氏であつた。

出席者 路郎・一十・紫香・三司・すむ・文蝶・永堂・夢裡・古方・哲水・天光・日出也・灰兒・三晃・いわを・梨光・白香・風路・淡舟・正司・紅山・醉歩・芳鳴・笑風・久仁於・喜久堂・鮎美・唯義・塔仙・十字路・柳水・愛論・万榮・梅志・梅里・豆秋・翻骨・栗・湖洲・修三・生々庵・柳亭・貴山・春集・恒明・志乃布・白柳子・小松園・花村・竹莊・瓜平・梨里・霞乃

兼題「轉居」 麻生路郎師選

轉居を先に知つて二号です 季 賛 轉居先妻の若さが案ぜられ 柳 水

轉居したさうな轉勤したさうな判のいる用が轉居に付きまとい 轉居して女は早い額馴染 借金通帳の轉居と云うならん 轉居して蚊帳の吊手をお忘れ来 植木迄引抜いて行く後家 アパートからアパートへ移る味氣なき 轉居してまだ井戸水に親しめず 日まわりへ名残りの水をやる 轉居して今日からいらぬ定期券 貧乏しい／＼轉々と居を移し 轉居した日にも子供泣いて来る 儲かつたらしい轉居の通知狀 轉居して来たお隣はよく笑い 轉居しておなじ／＼の子を見つけ 轉居してまた電着になやまされ 夜逃げの様な轉居を子らは嬉しう 轉居した当座は遅刻せず勤め 轉居通知道順かくにもめてゐる 轉居した当座は隣のカスを借り ウナ電が来て宿替のあわてたり 轉宅に子供同志の別れあり 幽霊屋敷へ来てつきあひせぬ一家 轉居先さがし廻して恩返し 子の眼にも今度の家が狭く見え 引越と同時に第二夫人出来 兼題「催促」 須崎 豆秋選 拂うがなきつい催促しなはん 居催促猫が膝まで上つて来 礼厚うして催促は断はられ 催促へ身の上話長かりき 新聞を読んでしまつた居催促 催促を断るお茶とお菓子が 出七面山 ぐうしても取る催促となる煙草 淡舟 催促の重なり犬の名をおぼえ 小松園 催促をのがれ別府の湯にしたり 手土産で行く催促の氣の弱さ 醉歩

催促に馴れた女の軽い口 水 堂 催促をするとうづなと勝手にせえ 梅 里 催促の返事何かを食ふて居り 紅 山 美人ゐてフツ催促を言ひそぐれ 七面山 催促をすれば財布を開けて見せ ぶかろ 催促に行く日のハンカチと締め 文 蝶 催促に來たなと思ふ猪口をさし 香 林 催促に來たので催促もむきになり 紫 香 催促に來て將棋を負けて去に 文 蝶 催促の方が仰山蚊に食はれ 鮎 美 催促をするとそや／＼忘れてた 梅 光 氣に入らぬことを催促いゝはじめ 居催促へ風鈴しばしなり止まず 兼題「默殺」 村松 夢裡選 母一人子一人默殺するばかり 貴 山 默殺の冷えし番茶となりけり 香 林 默殺を勝氣の妻がはがゆがり 生々庵 默殺へ我れ焼酎を味方とす 三 司 默殺の母に坊やおさまらず 一十 待つてゐたのに一べつをくれただけ 翠 光 默殺へ我問せずと食ひ続け 小松園 默殺へ女心のおさまらず 三 司 默殺々々月給前の縄のれん 醉 歩 数字だけちらり默殺されるなり 紫 香 隘口え女世帯はさからわす 水 堂 經度の視線へ女ガムを噛み 柳 水 默殺へ貴方に似てる嬰子を抱かせ 香 林 默殺されてもすチコチヨイと喋べり 小松園 催促はしたがおもちや默殺して家計 唯 義 催殺はしたがおもちや默殺して家計 志乃布 催殺をして踏むトロッコと灯がまじ 翻 骨 ウィンクを默殺出来ぬ金を持ち 春 集 文無がとばかり默殺されちよい 瓜 平 默殺をされた理由を酒に聞く 久仁於 默殺に馴れ切つてゐる勤め振り 七面山 默殺へ一矢報いた捨台詞 同 灰 兒 默殺へ溜息の恋見せて書き

兼題「鼻唄」 清水白柳子選 鼻唄は妻の氣持のパロメーター 塔 仙 鼻唄へも時間やではよいきや 湖 洲 鼻唄は懐かし十年前の恋 三 晃 鼻唄の父へ子供が續一つ 紅 山 鼻唄が郵便受けへ走つて行く 十字路 鼻唄へまごにヘットライト照る 翻 骨 鼻唄が赤信号えひつかかり 梅 志 鼻唄へはばり得意な節が出る 修 三 鼻唄の知性をそつと覗き見る 梅 里 鼻唄になると鼻唄歩を早め 唯 義 鼻唄とミシンの音とよく揃い 柳 水 守衛默々鼻唄が前を行き 万 榮 鼻唄に吊皮二つ振られる 柳 亭 鼻唄で外米の石撰つてゐる 哲 水 鼻唄は牛の歩みのまゝ歩む 翠 光 鼻唄は牛の歩みのまゝ歩む 白柳子 客があるのに鼻唄の若い者 小松園 兼題「へんくつ」 菊沢小松園選 へんくつにされてコック貯である 湖 洲

小兒科 内科 性病科 安岡醫院 安岡三四郎 道頓堀・日本橋南詰 東へ半丁溪側 電話南⑥三二四六

偏屈が一人混つて纏らず
へんくつは氣のすまは食はする
偏屈はへんくつなりにある理窟
へんくつの親爺で賣つた縄のれん
門涼みへんくつ一人別にいる
へんくつが一人後の三等車
へんくつがニコリと猪口を受け
へんくつな男に猫がよくなつき
へんくつの腕親方は見逃がさず
入選をしたへんくつは写される
へんくつなりに明るい話題もち
へんくつはへんくつらしくてさ
へんくつが独りにされて寝てさ
氣に入つた時だけへんくつよく喋り
子を抱いた顔へんくつの顔でなし
へんくつを一人残して皆んな立ち
へんくつも娘の恋に目をつむり
へんくつの下駄面白いちびりよう
言ふ事も云々へんくつ中座する
へんくつな男にあつた温かみ
人生五十もうへんくつに箔つき
へんくつも金の融通だけは附け
席題「先輩」 北川 春集選

先輩を聞き明治の話聞く いわを
先輩え先輩らしい氣を配り 水堂
先輩が此処に居るぞよ甲子園 萬樂
先輩にまかしていますいゝ話 愛論
先輩へ席をゆづつて海が見え 竹莊
先輩はよと先輩去ぬつり ドプロクはよと先輩去ぬつり 笑風
先輩の名簿に頼る折靴 醉歩
先輩を凌ぐ酒量を見込まれる 同
焼酎の先輩と聞き親しまれ 久仁於
何かする都度先輩を担ぎ出し 天貧
弔辞読む先輩は借があり 花村
先輩に先輩がある苦心談 十字路
先輩え恋の取持ち迄頼み 柳亭
先輩にされて毒味の菓子をと 夢裡
バスコントロールも先輩から習ひ 古方

大阪南支部句會

九月十九日 於 阿倍王子神社

先輩へ茶茶を出して恐れいり 風路
軍隊で覺えた腕のめしの出来 恒明
食堂と書いたためし屋で親しめず 水堂
腹立てたためし粒をさうと踏み 醉歩
めしの種心にもない世評を言い 文蝶
その上に犬のめしやら猫のめし 無入
飯にしてからが進めぬ会議録 小松園
めし櫃の前へ姑出陣し 八重子
外食券めし屋は不氣嫌そうにし 貞女
同様の悲劇こゝにもめしをだし 梅志
めし櫃の底はさけられに嫁が喰い 貞女
下心風呂に這入れのめし食への 貞女
めし粒で貼つた名刺の二階借 貞女
農繁期蝗が畫のめしへ来る 貞女
妻めしと不平の云えぬ記事に 貞女
順番が来る窓にめしに立ち 貞女
筆太に「めし」それは松並木 貞女
ともかくも飯にありく氣で座り 貞女
能率を云うて机の位置を変へ 貞女
氣兼ねた位置で夜鳴の灯がこも 貞女
均衡は金んだ位置にピカソ描く 貞女
母ひとり子ひとり門出静かなり 貞女
この位置に墓が建てたい丘に居る 貞女
索寞たる人生不安定なる位置に生く 貞女
頼り切つた幸片隅の妻の位置 貞女
隣りの位置随風が吹く吹く 貞女
その位置に寡婦美しく秋に入る 貞女
十年の重さに耐えて椅子の位置 貞女
私刑私刑足のふるへが止まらない 貞女
更生の希望リンチに目をつむり 貞女
百叩きされて魔窟の灯を逃がれ 貞女
純潔を護るリンチの座に座はり 貞女
リンチまで受けた覚悟が崩れかけ 貞女
パンパンのリンチチヌチカルになり 貞女
怪しからんリンチ市警の耳に入り 貞女
シユミーズを脱ぎ私刑のあつぱ 貞女

東京支部句會 (東京都)

九月五日 川村 好郎報

学校の私刑に泣いて子がかへり 梅志
私刑の恐怖へお母さんの顔浮ぶ 淡舟
赤飯を炊いて小さい門出なり 葉光
再起する門出を赤は信じきり 水堂
独立の門出苦難の日が明ける 貞女
新婚の門出日誌を書きおとし 無入
就職がきまり校門振り返り 梅志
角かくし門出を送る目がうるみ 風路
焼酎は呑むと門出見送られ 豆秋
雄々しくネオンに生む眉を引き 野介
その門出しつけの糸はつけたま 貴山
親の手をはなれ苦難の道づく 仲平
予感ふとさへぎらものあり夜の霧 葉平
だまされて予感が当るあほらしき 恒明
当選の了感財布を締め始め 無入
クビになる予感へ今日サボッて 野介
薄情な人と予感があつたけぞ 亞鈍
予感追ふ暗い心を抱いて寝る 天國
死の予感掌に秋風を握り締め 文蝶
呉れそうな予感集金笑顔見せ 同
茶柱へ予感はずでに過去のもの 伸生
予感さへ無く恋人がボカリ死に 貴山
離婚届三文判を押して来る 梅志
男には不自由せんと離婚する 貞女
別れ話しもさつと決める若さなり 貞女
別居して徐々に離婚をする積り 貞女
手切金出したは収めた離婚なり 貴山
離婚してまのパーのナンパーワン 貴山
早ら雲離婚の話進む日々 葉平
カチカチ離婚の傷手タイプ鳴る 葉平
離婚したなら君は單なる女給だよ 葉平
離れしなら君は單なる女給だよ 葉平

京都支部句會 (京都市)

九月 於 仲源寺 村松 夢押報

素振にも出さずもうけている男 淨弓
意味の有る素振り土曜の女事務 あきら
そう云へばその素振も云ふ記憶 ふじ彌
應接も湯殿も附いた権利金 草之助
寡婦の腫の強さに負けて應接間 紫郎
應接は妻にまかせて原稿紙 小秋
長針の一とまわりした應接間 迷々
應接間新聞記者は歩いて見 好浪
手を拭いて出る應接は留守ぞ知れ 司郎
グラビヤになる應接間妻語る ふじ彌
金を持つ應接室の板の椅子 幸男
一坪の庭背からのマンドリン 喜由
庭いぢり妻の意見もいれてやり 淨弓
放す虫二晩程は庭で鳴き 喜由
庭の裏と静かに向ひ合ふ孤独 つぶて
打水の庭へ客待つ南花壇 傳生

東京そばと 灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店 大萬
★大万川柳(第九回)を募る
兼題「空腹」 路郎先生選
締切・十月十五日 句額五句以内
発表・十月廿一日 (店內に掲示)
御投句は大万宛・ギなたでも

地圖に無い道でキャンパは煙上げ 山雨樓
日本地圖決定版を急ぐ秋 高志
結局はタバコ屋で聞く地圖を見る 不二
地圖書いてくれたが同僚うき書いてなく 好郎
内氣な娘日記もつけず思ひつめ 山雨樓
煙草ばかり吸うて内氣のたよりなく 稻水
督促に行つて内氣は又借られ 好郎

理想論果さぬまゝに年が寄り 和 水
 岡山縣廳支部句會(岡山市)
 七月七日 於 縣廳内世話課 服部十九平報

断つてゐるに押賣荷をひろげ 夢沙子
 新婚と見て押賣のねばること 中山子
 押賣が長居 晝食ぬきになり 緋 呂
 見るだけでよいと押賣荷をあげ 忠 美
 押賣と政治談義の日曜日 鉄 骨
 買わずんば今夜押入る眼の光り 紫 郎
 押賣もさけて通るはよろず店 呆 人
 押賣りの凄味でたわし一つ買ひ 格 一
 腐れ終昔は好きもし好かれもし 鉄 骨
 腐りかけものは母さん引き受ける 奈 々
 雑炊へ腐る午前ものを入る 風 来 子
 女店員眼と眼で客を批判する 忠 美
 女店員入用ジャズの音が洩れ 風 来 子
 女店員お客になつた公休日 十九平
 大時計故障のまゝの年度末 同
 ホン)こたけは当座は鳴るラジオ 風 来 子
 空いたのが来たが故障の札が 十九平
 駆落は一歩歩いて汽車を待ち 風 来 子
 駆落に問えば氣むづな親が有り 綠 正
 駆落の時計も旅費の中へ入れ 風 来 子

川 雜
 九月 岡大支部句會(岡山市)
 於 學校食堂三階 大森風來子報

化粧をしズバリ並んだトイレット 茶 々
 見ては覗いちや駄目よ化粧室 風 車
 下心あつてか化粧して迎え 茶 々
 マネキンにだの化粧をして貰ひ 十九平
 夜行車に朝を迎えるパフを打ち 鉄 兒
 お化粧をなほす退社の五分前 湖 月
 吸取紙見られなく文字が浮き 健 坊
 愛の言葉が半分残る吸取紙 七面山

帳尻の赤字に馴れた吸取紙 鉄 兒
 吸取紙しかへて女事務の晝 北 星
 仲直り吸つた方から酒をつぎ 風 車
 両方であやまつている仲直り 大甲帽
 仲直り胸に一物ある握手 鉄 兒
 仲直りしてれと母が連れて来る 十九平
 仲直りすれば恩師が泣いてくれ 壽 子
 つぶれそうにちて勞資の仲直り 潤 年
 仲直りする迄女房無言でい 格 一
 仲裁の酒で喧嘩をまたはじめ 潤 年
 パラツクの間隙にいて星が見え 格 一
 いゝ鴨と見れば女は隙を見せ 健 坊
 隙のなにかまで女チト甘え 忠 美
 隙のある構え無氣味で打ち込めず 十九平
 西瓜賣りの音ならと保証する 風 来 子
 発車ベル連れの一人がまた来ない 十九平

川 雜
 九月十八日 於 永康病院會議室 大西 迷窓報

月の出がチト邪魔になるランデブー 嘉 子
 留守番は寂しいけれど星と居る 信星子
 夜の道逢へるあてなきまゝ歩む 迷 窓
 語らひ夜更けの虫も負けず居る 國定子
 別れの夜汽車のおくれるのを願ひ 嘉 子
 晝下り牛のよだれも遅々として 晃 子
 晝中は婦人部となる社宅 潤 年
 担がれて自轉車舟に乗り移り 魚 善
 自轉車が欲しい不便なことに住み 敏 子
 合乗りは先づトラツクをやりまし 迷 窓

日の丸句會(鳥取市)
 於 河村日瀧子報

銀行の敷地四角に巾をとり 日瀧子

勤続二十年銀行の庭を掃き 八 歩
 えんのない銀行ばかり建ち並び 粗 粒
 露天屋に店先を貸し雨戸貸し 鉄 洲
 地下室のこアドルムを呑んだこ 湖 山
 地下室が有るとにらんだ捜索隊 遊 星
 エレベーターで地階に降りて来た 鐵 洲
 デパートの宣傳に地下ゲリル 武 田
 地下室で税務署員の目をのがれ 貴美女
 御無沙汰をしてる硯の薄ぼこり 八 歩
 御紋付賣も出来ない硯箱 牛 茶
 硯にも見える先祖の骨董味 耕 民
 履歴書へ妻は硯を洗つて来 法泉子
 書く柄やないと硯を押しかけし 日瀧子
 自轉車の敷測員と知る映画 芳 道
 据へて飲む自轉車内へ入れ 日瀧子
 逢ひに行くべタルも軽し月もし 湖 山
 新婚へちと迷惑な泊り客 芳 道
 呼出しの電話迷惑そうな声 三 步
 えゝ声か知られど近所迷惑や 日瀧子
 迷惑な相手と知つて留守つかひ 貴美女
 涼み台他所の團扇が残つてゐ 牛 茶
 客室へ好みも見せた團扇も出 耕 民
 死んだ虫乗せる役にもなる團扇 小 松
 儲け上手店はそれ程派手でなし 耕 民
 実直な儲け眞直戻つて来 八 歩
 片腕と言われてやはり次長で居 芳 道
 此の腕にまかしときな河豚料理 小 松
 飛入りは腕に覚えの宮相撲 傷 月
 一命を博士の腕にまかせとき 新 雪
 腕まくりさて王將の逃げる道 湖 山
 腕すもう眞赤な顔の程もなく 粗 粒
 二の腕に子の体重が日毎増し 遊 星
 モデルふと秋の氣合の風を知り 八 歩

南区 川柳同好會(大阪市)
 医師會 八月十二日 於 天見・南天莊

食足りてもう田舎とは縁遠く 迷 路
 田舎者律義ばかりを買はれてる 彈 正
 田舎にもあるとネオンに驚かず 無名林
 疎開して田舎に借しい人のまま 捨 舟
 牛二頭うちに居ますと女工来る 無名林
 東京の外は田舎と憎てらし 同
 田舎者らしう見せまい交叉点 生々庵
 汗出して稼いでビヤの泡となる 瑞枝郎
 汗かいてまで非敵と渡り合い 同
 赤帽は大げさに汗拭いて見せ 生々庵
 汗顔の次第と父のきまり文字 迷 路
 うす物に美人の汗の涼しそう 烏 耕
 横綱を倒した汗が写される 捨 舟

川柳雜誌

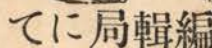
に御希望の号数記入の上係まで御問合せ下さい。

品質優良
 先ペンカチ



ペンカチ
 カチカチ
 カチカチ
 カチカチ

大阪市東区豊後町四八
 立川商事株式会社



たかも知れない。▼富士野
鞍馬氏は「常盤御前」を寄

募
集

課題吟募集

仲人（十句）夷一笑選
集金（十句）川村好郎選

朝
(十句)
奥村丹路選
(十一月廿日綴切)

大和風來子選
(十二月廿日繪切)

近作柳幃（雜詠廿句）麻生路郎撰

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、佳

所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一級作家の雑吟

▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞全
員に限る。

B列5号 每月一回一日發行

川柳雜詠 第十一号
一册 金三〇四

半ヶ年概算
送料(三円)
金一九八円

昭和廿六年十一月廿五日印刷
昭和廿六年十一月一日發行

大阪府住吉區内野代西五丁目二五番地
編輯・發行人 麻生幸二郎

大坂市住吉區内万代西五丁目二五番地
發行所
川柳雜誌社

振警口座 大阪 七五〇五〇